

思いは東北!

Vol.3 あれからの東北、もうすぐ震災後6年

平成28年11月

NPO法人 日本救難バイク協会
理事 **平井和広**

目 次

序 章	震災からもうすぐ6年	
第 1章	放射能被害	1
第 2章	NPO法人 FUKUSHIMAいのちの水	2
第 3章	原発事故現場で活躍した人たち	3
第 4章	原発被害の市町村は	5
第 5章	熊本支援	8
第 6章	7度目の東北支援	12
第 7章	陸前高田市では	15
第 8章	心的外傷後ストレス障害(PTSD)と戦うNPO	19
第 9章	国民の最強の応援団、天皇陛下	20
第10章	アスリート応援団	22
第11章	ボランティアと派遣職	26
第12章	最後の砦 自衛隊	28
第13章	トモダチ作戦	31
第14章	空飛ぶ海猿	32
第15章	復興への思い、若い力	33
第16章	風の電話	36
第17章	響け 復興の音色	38
第18章	つなぐ命、思い出を忘れない	39
第19章	NPO法人 日本救難バイク協会	41
最終章	いつまで続くのだろう	42

序章 震災からもうすぐ6年

東日本大震災で被災されました方々にお見舞いと、亡くなられた方々に心よりお悔やみ申し上げます。

平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源地とする震度7(宮城県栗原市)の東日本大震災は、阪神淡路大震災と異なった被害をもたらしました。

津波による建物の崩壊、死者、行方不明者の発生をもたらし、一次二次産業の東北と三次産業の阪神・神戸、津波による福島第一原発事故被害、さらに5年を経過した現在でもなんら復興が進んでいない現状等、さまざまなことなりのあります。

ただ、平穏な生活に突然の悲しみを与えたことにはなんら変わりありません。少しでも元の生活に近づけるように支援を続けること、震災を忘れないことが大切です。

平成23年9月に南三陸町、10月に山元町、24年5月に七ヶ浜町、25年3月に再度 山元町、26年5月、27年9月に郡山市、南相馬市、そして28年5月には郡山市、山元町の現地支援を行い、石巻市や陸前高田市などの被災地の現状を確認してきました。

5年を経つことにより見えてきた、新たに発生した問題点もあり、第3版の東北レポートを書くに至りました。

今回も新聞、ネットにより記事が多い中で、自身の考えや見たことを加えて、被災地での声を交えて整理し、多くの方に読んでいただきたいと思っています。特に、7度目の東北支援ではマスコミ報道と異なった現地の考え方、現地の指導者達の一部は地元を考えていないことも分かり、自身の考えの甘さを痛感しています。

そして、7度目の東北支援計画中に起きた熊本大震災についても、お話をしたいと思います。

本当に阪神・淡路大震災、東日本大震災の教訓が生かされているのでしょうか。

マスコミ報道で聞きつけた造語があります。「福幸(ふっこう)」です。

復興の当て字とも言うのでしょうか、復興は福幸をもとめることでしょうか。

熊本大震災でお亡くなりになりました方々にお悔やみを申し上げるとともに、被災されました方々には心よりお見舞い申し上げます。

震災のことは忘れない、貴方たちのそばには私たちがいる。

人の考え方には温度差があります。

「そんなことは知っている」とお叱りの言葉なく、最後までお読みいただくことをお願い申し上げます。

第1章 放射能被害

東北震災(あえて東日本大震災とは言いません)からもうすぐ6年を迎えようとしています。私の東北支援の4回までは宮城県、そして以降3回は福島県中心となっています。そしてレポートは第3版を作成するにあたり、一番復興が遅れている福島、原発事故問題から始めたいと思います。

私は学者や専門家ではありませんので、数字的なものについてのお話は避けたいと思います。

原発事故はある意味、人災であると考えています。人災については政府が対応すべきであり、ボランティアの対応ではないと思っていました。しかし、一向に進まない現状に痺れを切らし、5回目以降は福島支援が中心となりました。

放射能被害については、いろいろな学説や考え方があります。この程度では生活に影響は無いと言う人もいれば、保障がない限り極力被害を避けるとも。

学者さんのなかには長崎原爆のことをこう言っています。「放射能は水の底に沈み、わずかずつ溶けています。その水を未だ、長崎市民は飲んでいる」

子どもの甲状腺被害については、チェルノブイリ事故に比べて福島の方が大であることが確認されています。このことについても、「検査の精度が向上しているので、比較の対象とはならない」との意見があります。

放射能は風に飛ばされ飛散し、水に溶けたり土に付着したりします。そして森の木々に付着した放射能は再び、風に乗って飛散を続けます。

福島県郡山市は原発から離れており、避難地域とはなっていません。でも、線量計による放射能値は県内でも高く、建物の崩壊は無くとも、市民は放射能被害と戦っています。行政曰く、「水道水は安全です」でも、小さい子どもを抱える家庭、妊婦さんたちは少しでも放射能被害のリスクを避けるべくペット水を買っています。

放射能は重いので地上に近くに貯留するため、子どもたちは被害にあいやすくなっています。そして子どもたちはこの先も生きて行くんです。微量でも蓄積されていくんです。大人に比べてリスクは大きいのです。

人体が放射能をあびると人体を構成する正常細胞を壊したり、傷つけたりします。線量が低い場合は、身体に備わった修復作用や回復機能により修復されますが、修復されなかった場合には放射線障害が発生すると言われていています。1,000ミリシーベルト以上の高い線量を受けると、臨床的に問題になります。200ミリシーベルト以下の低い線量では、急性の障害が現れる臨床例は見受けられません。生涯のうちには出る可能性が無いと言い切れないので、確率的影響と言います。

人間は自然界からも放射能を受け、食物や医療(レントゲン撮影)でも放射能を吸収しています。長時間飛行機に乗ることで通常以上の放射能を吸収しています。

このように普通の生活をしていても、放射能を吸収していますが、妊婦さんや小さな子どもにはリスクを背負わせたくないのが当たり前かと思います。一日も早く、放射能を気にしないで生活できる環境を取り戻すべく、政府は対応してください。

さて、次の章では福島県郡山市のNPOの活動をご紹介します。

第2章 NPO法人 FUKUSHIMAいのちの水

もともとは東日本大震災時に災害ボランティアを行っていたNPOから、福島放射能被害を目の当たりにし、これに対応すべく派生したNPO法人です。

郡山市に本拠地を置き、代表理事は 坪井永人さんとおっしゃいます。少し彼の履歴をご紹介します。プロテスタントの牧師さんで、ミニFM局も開設されています。もともとはデベロッパーで、放射能を気にせず、生活できる環境作りを考えておられます。長兄は日本医師会長、世界医師会長をされました 坪井栄孝さんです。JR郡山駅近くの倉庫を借りて活動をされていましたが、手狭になったかで少し中心から離れたところに拠点を移されています。農協の倉庫と支店を買い上げ、物品の保管、各種イベントが行え、活動に十分なスペースとなっています。

スタッフは志が高く、専従で活動をされる方、スポットに活動される方々も多く、本当にありがたいことです。東京から仕事を投げ出し、ご夫婦で生活の保証も無く、活動をされている方もいます。

あっ、活動の内容についてご紹介が遅れていました。活動は前章にふれている放射能被害に怯えるご家庭の支援です。水の提供から始まり、フードロス食品(消費期限の近くなった食品)を提供することにより家計の負担を軽くしようと考えています。さらに、放射能についての講演会、同じ悩みを持つ母親達のディスカッションの会や子ども達が楽しい時間を過ごせるようにクリスマス会等も開催しています。

水を大量に寄付してくれる団体、活動費を提供してくれる団体等が、FUKUSHIMAいのちの水を支援しています。この支援により、水の調達、フードロス食品の調達・提供を行うと同時に、心の支援も行っています。

坪井さんはこう言っています。「私達は信じています。水の配給では子ども達の被爆を止めることは出来なくても、せめて子どもたちを福島の大人達や協力者は見捨てなかったという歴史を残すことができるだろう…。見捨てられた世代と、見捨てられなかった子ども時代を経験した世代では、必ず違いが出てくると信じています。私達はせめて、見捨てられなかったという愛の歴史を残したいのです。願わくば、日本の次の世代のために、また20年後の福島の子どものためにお祈りください。福島の子どもの災難が、かえって多くに見捨てられる人々の希望にと変わるように、お力をお貸しくださいますようお願い申し上げます。」

少しでも結構です。このような活動にご協力をお願いします。ご自身の負担にならない程度で長期の支援をお願いします。福島の子どもの未来のために、日本の子どもの未来のために!

NPO法人 FUKUSHIMA いのちの水
福島県郡山市逢瀬町多田野宮南2 サンタハウス
☎090-7079-5011 FAX024-983-1838
Email fukushimainochinomizu@gmail.com

第3章 原発事故現場で活躍した人達

原発事故の現場では、多くの人達がその対応にリスクを省みず活躍しました。その中でも、原発冷却のため放射能と戦いながら、その使命を全うした人達の活躍を取り上げてみます。

あの3月11日、地震発生から1時間を経過するまもなく、津波の到来により原発施設は被災した。そのため全交流電源は喪失してしまった。このことにより、14日11時1分 水素爆発が発生、使用済み核燃料プールの水位低下が懸念され、水位回復のため多くの人達の、わが身を省みない活動が求められた。

陸上自衛隊は水素爆発により建屋上部の吹き飛んだ福島第一原発3号機、4号機のプールへ、ヘリによる上空からの放水を行うこととした。まず3号機への放水を行うべく、16日 ヘリが3号機上空30mにて強い放射能を計測し、これにより断念し引き返した。翌17日、第一ヘリコプター団 加藤2佐は出動を告げられた。大型輸送ヘリ「CH47」を使って、海水を汲み上げ、3号機に投下して、燃料プールの水位を上げるかつてない危険な任務である。危険な任務が告げられた時、多くの隊員はその使命感から手挙げをした。選ばれなかった隊員は、任務に向かう仲間のために機内に防護のため敷くタングステンシートをかき集めます。鉛の入ったベストを着込み、任務に向かいます。午前8時56分 基地を離陸、1時間ほどで原子力建屋の上空90mに到着、放射線量は87.7マイクロシーベルトである。9時48分 1回目の放水、計4回で30tを放水するも、高い位置からの放水は風に流されプールの水位維持に役立ったかは不明である。霞目基地に戻った加藤2佐達は仲間に感謝したが、任務に対する達成感は無かった。

17日、陸からの放水作業に着手したのは警視庁機動隊である。暴徒を鎮圧するために使用する放水車による水位維持行動である。ただ、放水車の放水は下から、かつ点の放水で無く、霧になってしまう。東電 吉田所長も理解のうえの作業である。警視庁警備2課管理官 大井川は、6時40分放水車に4名の部下と乗り込む。7時5分 1回目の放水開始、10分間で44t、3回行う予定であったが、被爆上限の80マイクロシーベルト設定の線量計のアラームにより1回で断念する。大井川管理官もしかり、加藤2佐同様、納得していない。部下達の行動は賞賛するに値するも、結果として原発事故での避難生活を余儀なくされ、現在もその状況をかんがみると納得できていない。「もっと放水できていればとの思いは消えない」と言う。

自衛隊、警察の活動の成果が見えない中、続いて消防(東京消防庁)による屈折放水塔車が投入された。ハイパーレスキュー隊 三島は屈折放水塔車の操作を任された。18日午後、5人の先発隊による偵察に続いて、午後11時30分 本隊46人が構内に入り、建屋約45mに対して、アームが届くのは22mであり、建屋の大きさに燃料プールから立ち上がる蒸気を確認するに放水位置を考える。19日午前0時前、3号機の前でホースを伸ばし海水が届くのを待つ。0時30分 海水の到着を確認すると三島は、放射線被爆を避けるために50m離れたバスの影から一気に走り、操作台に飛び込んだ。離れた位置からの指示により放水方向を調整しつつ、その活動の成果を確認することが出来た。三島達の活動を受けて、3号機には継続的な放水が行え、大阪、川崎の消防隊も駆けつけることとなる。19日夜、自宅に帰った三島を迎えたのは、身重の妻と小さな長女であった。

22日、3号機の放水が総力戦となった頃、4号機でも燃料プールの水位低下により危機が差し迫っていた。投入されたのは高さ58mに届くアームを持つ「麒麟」と呼ばれるドイツ製の生コン圧送車である。
この生コン圧送車は国内に数台もなく、輸出用であったが急遽確保された。20日に現場に到着、原発側の職員に操作方法を指導、22日午後5時17分、放水が開始された。この圧送車での放水は、自衛隊のヘリ、警視庁の高圧放水車より、より確実に水の補給が行えた。

生コン圧送車による放水は、1号機、3号機でも開始され、計7台が投入された。最終的には生コン圧送車の投入により水位の維持が可能となり、使用済み核燃料が露出して放射性物質が広範囲に拡散する事態は避けられた。
自衛隊、警察、消防等の活躍、相互協力により最悪の事態は回避できたのである。

第4章 原発被害の市町村は…

原発事故は地震、津波以外に立ち直ることの出来ない、出口の見えない被害をもたらしました。

避難をしなくてはいけない住民、避難しなくても放射線に怯える住民…

南相馬市小高区、飯館村、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町、川内村、川俣町、葛尾村は帰宅困難区域に…

そして、郡山市では原発から離れていても残留高放射能に怯えて生活しています。

楡葉町は平成27年9月、県内7市町村では初めて避難指示が解除されました。ただ、4年半の避難生活で築かれた新たな生活を捨てて、故郷へ帰りたくても帰れない方は多くいます。

子育て世代は、避難先で仕事を見つけて生活を再建してきました。帰宅しても子どもを育てる糧を、確保できなければ帰るに帰れません。

仮に帰っても多くの問題が待ち構えています。

生活するためのインフラです。

前述した生活の糧を得る仕事の供給、生鮮食料品を中心とした食料の供給体制と救急時の医療体制の確保等です。

車で移動できる世代はともかく、そうでない高齢者にとって食料品の調達をはじめ、生活のためのインフラが整備されないと安定した生活は望めません。

医療については、10月に民間の診療所が再開される予定、県立の診療所の計画は28年2月となっています。

また、避難の原因の原発事故、水道水の源は木戸ダムであり、今でもその底には放射性物質を含む泥が沈んでいます。

子育て世代が一番に気になること、小さな子どもに放射能というリスクを少しでも回避したい、妊婦さんはおなかの赤ちゃんに放射線のリスクを与えたくない…

そのためにはミネラルウォーターを買って生活しないといけない。

楡葉町は放射線量が他の市町村に比べて低く、帰還のモデルケースとなり得るべく期待されています。

現実には解除に伴う帰還者は一割、以降は徐々に増えるも以前の様には戻りません。

更なる住環境の整備や地域経済の復活無しでは帰還は進みません。

若い世代も帰還できる、それによって町も活気を取り戻せることができることを願っています。

28年11月のラジオから聞こえてきました。

「帰還者は1割程度、高齢者が多い。今後の問題は生活環境、インフラについてはコンパクトシティを考え、実行している。若い力がないと活気が湧かない。」

そして、事故後、春に田植え、秋に収穫した初めて米の収穫がありました。

遅いですが、少しでも復興に近づいています。

原発被害の福島からそれたお話をしますが、

28年5月の7度目、東北支援では初めて岩手県を訪れました。

陸前高田市で仮設診療所の所長先生にお聞きした話です、目から鱗が取れました。

行政は町のインフラのために、避難先で事業等を行っている企業、商店に戻ってくることを促しています。

何とか避難先で経営確保している企業等に、戻っても経営が確保できるかは疑問です。

ニーズが無いのに戻れるわけはありません。

「卵が先か、鶏が先か」と同じで、インフラが先か、住民帰還が先かです。

行政が十分なる補助と支援を企業等に施し、帰ってきて生活できる環境を整えて帰還を呼びかけるべきでしょう。

経済力のない市町村に任せるのではなく、国が復興予算を使って行うべきでしょう。

やっつけて、私が知らないだけならごめんなさい。

ここで少し視点を変えた意見を述べてみます。
行政やマスコミが言っていたらごめんなさい。

避難者の帰還による町の復興だけでなく、他からの移住者を求めてはどうかと思います。
住居の提供、仕事の提供により人口の確保が、町を活性させます。
新たな起業により、地元のシンボルになれば、なお更に良いではありませんか。
考えてみませんか。

宮城県ですが、南相馬市小高区は28年7月に一部を除いて、避難指示が解除されています。
私は26年5月、27年9月に支援活動を行いました。
この時の活動は復興というより、朽ちていく故郷、住居を少しでも現状維持して行くものでした。
ここでも檜葉町と同じ問題を抱えています。
南相馬市は「相馬の野馬追い」で有名な場所です。
家庭で馬を飼育し、念に一度のイベントに心血を注ぎ、子どもの成長を重ねています。
還って従前の生活をしたいが、避難先で新しい生活が出来上がってしまったては還れない…
故郷を愛していても還るに還れない。
そんな中でも一筋の光明はあります。
JR常磐線が避難解除とともに一部区間ながら開通したのです。
開通は復興に向けて、故郷再生の先導、光をもたらしました。

28年5月の東北支援の目的のひとつに、帰還困難区域を通る国道6号線を通することでした。
帰還困難区域である浪江町、双葉町、大熊町と富岡町を車で走って南下しました。
去年は通行許可のある車両しか通れませんが、歩行者、二輪車と軽車両以外は
通行が可能となっています。ただ、車外には出てはいけません。
国道から離れる交差点等には柵がしてあったり、警備員が立っています。
パトカーも頻りにパトロールしています。
道脇の放射線線量計は基準値以上の数値を示し、国道を離れると更なる異常値を示している
と言われています。
帰還困難区域でも関係者は、自宅に立ち寄ることができるとも聞こえてきます。
でも、避難からの帰還に目処はたっていません。

福島復興には汚染土の中間貯蔵施設(長期間保存)建設の問題があります。
25年3月、会津若松市で大熊町、双葉町と檜葉町の3町長が会談しました。
檜葉町は格段に放射線量が低く、檜葉町の避難指示の解除、復興を双葉郡の復興の
足かがりとするべく、中間貯蔵施設の建設を大熊町、双葉町で引き受けることを
提案したのです。これには中央省庁も驚き、その政治決断を賞賛せざるを得ません。
この提案が無ければ檜葉町の避難解除も無く、将来の双葉郡の復興に光は無かったのです。

前後しますが、28年6月14日に川内村に残っていた避難指示区域で解除がされました。
本当に安全が保障され、かつ生活していくための整備は整っているかは疑問なれど
住民の帰還は少しずつ前に進んでいます。
行政がしっかりと安全を保障し、インフラの整備を行ってください。

レポートを作成している間にも、6月15日のことです。
平成29年3月末までに全村避難している宮城県飯舘村の一部を除いて避難指示を
解除するという発表がされました。

8月には同じように全町避難が続く大熊町では、お盆にだけ一時宿泊の特別許可が
11日から始まります。

8月現在での解除などの状況を整理してみます。

- ・平成26年 4月 1日 田村市で解除
- ・平成26年10月 1日 川内村の大半で解除
- ・平成27年 9月 5日 檜葉町で解除
- ・平成28年 6月12日 葛尾村で解除
- ・平成28年 6月14日 川内村の全域で解除
- ・平成28年 7月12日 南相馬市で解除

以下は予定

- ・平成29年 3月 浪江町の解除目標
- ・平成29年 3月末 飯館村が解除予定、川俣町の解除目標
- ・平成29年 4月 富岡町の解除目標
- ・平成30～32年 大熊町「帰還可能な環境整備」目標
- ・未定 双葉町

本当に早く、放射能被害も無く、普通に生活できるようになって欲しいものです。

第5章 熊本支援

序章でも触れていますが、平成28年4月14日、同16日に発生しました震度7の地震を中核とする熊本地震によりお亡くなりになられました方々には、喪心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災されました方々にはお見舞い申し上げます。

東北レポートの中ですが、本章にて熊本支援活動実施報告をします。
災害ボランティアがどのように発展しているか、市町村がどのように取り組んでいるかもお話ししたいと思います。

4月発生直後では、災害救助等の専門家が必要とされるため、ノンライセンスの小生の出番は混乱の落ち着いた時期が適切であると判断、状況などの把握を行っていました。
5月のGWは地震発生前より7度目の東北支援を計画していたこともあり、かつ休みの調整も考慮して、6/18、6/19における現地支援を計画しました。

6/17 神戸市役所にてボランティア車両の申請を行い、一路熊本に向けて出発します。
ボランティア車両の申請とは、被災地ボラセンに対して活動予定の証明をもらい、居住地の市町村で申請することにより高速道等の料金が免除されます。
小生は東北大震災でも幾度も申請を行っています。
今回の熊本地震での適用期間は、当初は6月末まで、現在11月末までとなっています。
*ボラセン:ボランティアセンター

6/17は九州道北熊本SAにて車中泊となります。施設は一部破損しており、使用は制限されています。

6/18 早朝起床、目的地の御船町に向けて出発します。
御船町の活動拠点はボランティアセンターから離れており、町民グランド駐車場に設営されています。7時前に到着、ボラセンのスタッフ(地元社協職員、応援の他市町村社協職員)が集まってきて準備を始めます。8時過ぎにボランティア登録の開始、8時半頃にミーティングを開始します。 *社協:社会福祉協議会
依頼に対してチームの編成、車両、道具の準備を終えて9時に活動拠点を出発します。
12名で車両に分乗、現場に向かう途中では震災復旧工事のため、びっくりするような山道に迂回、現場到着は10時となります。
被災家屋から家財などの搬出、搬出後は廃棄すべく集積場までの運搬、集積場では分別作業を行います。
集積場は町民グランドを使用しており、現場から片道30分、これを2往復することにより本日の活動は終了します。仕事量、人数、車両台数の関係で14時くらいには活動を終了して、拠点に戻り報告を終えます。
チームには九州の方はもちろん、神戸や沖縄からの参加者もいます。
多くは活動経験者であり、装備はもちろんのこと、要領も心得ておりスムーズに活動を行い、昼食をとりながら東北などでの支援で話は盛り上がります。

活動を終えて拠点では情報交換会、益城町や熊本市での活動が見えてきます。
益城町では災害が甚大であり、自衛隊が投入、撤退後も専門集団の活動が中心とか。

さて、情報交換会の後は隣接する温泉施設で汗を流します。
今夜ももちろん車中泊、食料の調達を済ませて車に居ると微細な揺れを感じます。
地震の予感が、するとど〜んと震度3を喰らいます。久々の地震に少したじろいが、そのあと震度1が2発起こります。ちなみに御船町が震度3の時は、熊本市では震度4でした。
夜は雷を伴う雨、明け方は上がっていましたが警報が発令されています。
多分活動は中止だろうと思いつつ、活動拠点まで移動、スタッフが集まってきてミーティング、その後活動の中止が伝えられます。
せっかく熊本まで来ましたが、活動は18日のみになってしまう結果ながら、とりあえず当初の目的が達成され、夕方には帰神したという今回の現地支援でした。

以下に、活動で知り得た被災状況と支援活動で気付いたこととお話しします。

○被災状況について

九州道は益城・熊本空港IC～御船ICで片側対面通行が実施されていました。道路は多少のこぼこがあり、亀裂もあったようで、速度規制がかかり補修作業を行っています。活動した御船町では、倒壊家屋は確認されなかったものの、傾いた家屋、傾いた電柱、瓦が落ちたり動いたりしてブルーシートが掛けられている家屋が確認されます。古いお家では傾いており、建具が閉まらなくなり、かつ雨漏りで住めなくなった家も確認されます。道路は多少のこぼこで亀裂跡が確認されます。御船ICの料金所でも、地震による破損が確認され、一部閉鎖となっています。絶対数が少ないのか、テント村は確認されますが、数については思うほどの多さではありません。仮設住宅は準備されていると思われませんが、不足分か、車中泊した公園駐車場脇では、設置基礎のためのくい打ち作業が遅くまで行われていました。

支援に行ったのが6月ということもあり、インフラの確認はできませんが中心部では学校や店舗の営業等は支障なく行われています。水道について、小生の加入するNPO会員で長崎市の水道局勤務、給水支援に派遣されたと聞きます。

益城町では前述したように被害は甚大で、自衛隊の投入によりボランティアは制限されたとの情報があります。自衛隊の撤退後はプロ集団の活躍と一般ボランティアが活動しています。他のボラセンが縮小していく中、益城町ではボラセンの活動は毎日続いています。

○支援体制について

ボラセンスタッフの話をしましたが、御船町では初めてのことであり、中国・四国ブロックの社協が応援体制を組んでいます。廿日市、境港市、山口市…。応援社協でもボラセン運営は初めてのところもあろうかと思いますが、今回の経験がいざ、地元での災害発生には役立つでしょう。

ボランティアも広範囲から参加しています。

千葉県袖ヶ浦市からマイクロバスを持ち込んでの活動、富山から軽ワンボックスで寝泊まりされる方…。

九州でも鹿児島、福岡と休みを利用しての参加が多く確認されます。

前述しています小生と同じ神戸の方も参加しています。

愛知県春日井市でパラグライダーのインストラクターをしている青年、山岳関係の仕事にしています。地震発生とともにステーションワゴンで熊本へ、自由に動ける身だからと言って2か月にわたり、熊本市、御船町、益城町、南阿蘇村と活動を続けています。

関東の企業だったと思います、トレーラーハウスを長期間貸出、ボランティアの宿泊、休憩に利用されました。

○ボラセン活動について

ボランティアである表示について、東北や丹波ではビブス(サッカーなんかで紅白戦を行う際、チーム割がわかるように着ているベスト)を着用し、地元の人に知らしめています。

今回は布地シールに氏名等を記入、服に貼り付けます。

ビブスは洗濯、管理が必要ですが、シールは消耗品で管理は容易です。

ただ、一目でボランティアを確認するにはビブスが断然です。

いずれも長短あり、できればビブスにシールの両方がベストだと思います。

今までの災害復旧活動において、活動前に黙とうを捧げることは有りませんでした。今回の活動ではミーティング開始前にボラセンスタッフの合図により行われました。黙とうを捧げていなかったことに、違和感を覚えていた小生にはうれしい限りです。

熊本市ボラセンは現在、閉鎖中の動物園に移転しましたが、当初は街の中にあつたことから十分な駐車場が確保できず、活動に使用する車両、ボランティアの車両が駐車場所に困る事案が確認されています。また、移動も市電を使ったりで移動にも苦慮したようです。

* 10月?、さらに浄化センターに移転しました。

活動依頼件数に比してボランティアが集中し、活動時間が短時間であったり、ボランティア受付が早い時間に締め切られるなどと、小生が熊本市を敬遠して御船町に活動場所を選択した理由であり、御船町でのボラ仲間との情報交換でも確認されています。宿泊場所についても、車中泊できそうな場所は見当たらず、市内のホテルは予約で一杯、ボラセンから少し離れたスーパー銭湯(サウナ?)でボランティア優待されると聞いたのは御船町でのボラ仲間の情報です。

ボラセンでは被災者からの依頼とボランティアのマッチングを行います。局地的な震災でもあり、被災状況も多いながら阪神・淡路、東日本に比してニーズが少ないためか、多くのボラセンでは意外と早く活動日の制限、災害支援→生活支援にシフトします。被害の甚大な益城町でも、お盆明けから週末のみの活動と制限されます。被災の絶対数が少ない、その上、罹災証明の発行、判定不服に対する再調査が遅れている現状があります。判定によっては解体費用、作業は行政が行います。下手に片付けてしまい、判定が軽くなつては自己負担が増えてしまいます。そのため、ボラセンに依頼するのを控えている状況も確認されます。

今後の活動は判定から外れた被災家屋の家財、瓦礫の撤去、避難所→仮設住宅or仮設住宅→恒久住宅の引っ越しなどになってくるでしょう。

以上で今回の熊本支援、往復1500kmの移動、活動日が1日になってしまいましたが、総括してみました。また、今後の状況を踏まえて11月にニーズがあれば計画したいと思います。

このほか、マスコミ報道などにより把握できる範囲において、今回の熊本での対応と過去の対応を比べてみたいと思います。

○良くなっていること

東北でも他の市町村が支援する体制はありました。兵庫県は宮城県を、内陸部の市町村は沿岸部の被災市町村を…。今回の熊本震災ではより強固、広範囲での支援体制が組まれたかと思います。福岡市が支援物資の受付窓口となり、被災地へのクッションとなりましたが、十分に機能しなかったかと思います。

医療の面では急性期しかり、慢性期(人工透析など)においても特に支障はなかったかと思えます。

熊本はもともと医療が整った地域であったこと(核となる複数の病院があり、その他の病院も連携を取って役割分担がしっかりとできている)が功を奏したのかもしれませんが。急性期を担うDMAT(災害派遣医療チーム)やDMATの補てんを行うJMAT(日本医師会災害医療チーム)の運用も問題なく行われたようです。

過去の問題点、メンタル面でのフォローもDPAT(災害派遣精神医療チーム)が投入され、医療面では格段に進歩しています。

このほか栄養士会、理学療法士会も支援チームの派遣を行っています。

○進歩していないと思われること

避難所でのプライベートの確保については、カーテンなどでの簡易な区切り対応も遅れたようです。結果、車中泊によりエコノミー症候群による関連死が確認されています。自治体のマニュアルに車中泊、エコノミー症候群の対策について、盛り込まれてきていると聞かれます。

また、足の悪い高齢者に対しての段ボール箱のベッド提供はされましたが、少し遅い気もします。

避難所では近所の人たちが集まって肩を寄せ合うことができますが、仮設住宅は抽選で決まるため、隣近所に知らない人が住んだり、人間関係を作り直さなければなりません。孤独死の原因ともなります。仮設住宅をもととの住居地に従ってある程度の割り振り抽選も選択肢ではないかと思えます。

支援物資の偏り、困り込みなどが確認されています。
熊本市のように大々的に物資が集中する反面、マスコミに取り上げられる機会の少ない市町村では思うほど集まりません。必要物資を分けてもらうべく申し込んでも、「これは私たちに提供された物で渡せません」と拒否されます。
物資提供の偏りなどにより、交通渋滞や整理に人手を要しすぎて被災者支援に支障をきたします。
避難所での避難を選択せず、自宅避難者が物資を貰いに行っても拒否されることもあります。
前述しているように福岡市が支援物資の受付窓口となりましたが、十分に機能できなかった。被災していない福岡で受付をし、分別後、必要量を適時適切に被災地に搬入することにより現地での物資の偏り、現地での人手を直接支援に回すことができます。
今後の課題です。

ボラセンの設置について、熊本市のように中心部において十分なスペースが確保できないと、ボランティアに参加しにくい、移動しにくいなどの問題を生じます。
益城町のように企業の敷地を借りているために自由が利かない…
いろいろな問題もあろうかと思いますが、もしもの場合に備えて効率的に活動できる候補地などを選定しておくべきです。

自分のところは被災しないであろうと、いざという時のために準備をしない…
多くはそうなのかもしれません。
だからこそ、いざという時のために計画しておくべきかと思えます。
自分のところが被災した場合、近隣が被災、支援を行う場合などいろいろなケースを想定して計画を立てておいてください。

御船町のことでです。
震災直後、復興にノウハウのない町はある団体に災害復旧、支援要請などの業務を丸投げしました。災害復旧作業の依頼受け、ボランティアの受け入れ、義援金の受付などです。
この団体は良きも悪きも評判があります。東北震災を機に設立されたかと思えます。
活動は評価されるものと思われそうですが、やり方に問題があります。
東北で海中に潜って遺体捜索時の写真の公開方法、代表者の傷害事件、義援金の集め方…
町長はこの行為に批判を受けて、否定やら弁明をしたようです。
東北震災でも胡散(うさん)臭いNPOやNGOがありました。
市町村はいざという時の準備を怠らないことと、ボランティアは活動先をちゃんと正しく把握、理解してください。

このことは小生の阪神・淡路大震災でも経験したことです。
ボランティアは対価を頂かないことが原則です。
対価を頂くのはボランティアではありません。
被災者への義援金、寄付金のうわまいを撥ねるのはよろしくないでしょう。
活動資金は自ら調達したり、意義に賛同した方よりのカンパで賄います。

熊本震災から離れた話題となりましたが、本章はここで終わりにします。

第6章 7度目の東北支援

サラリーマンの小生にとって長期の休暇取得は困難であり、休日等を絡めての短期支援ですが、過去6度の現地支援を行っています。今回も平成28年のゴールデンウィークを利用して7度目を実施しました。震災後5年を経過すると、災害ボラセンの多くは閉鎖されていますので、宮城県南相馬市以外での活動はNPO法人の支援となっています。 *ボラセン:ボランティアセンター

今回は比較的長期に計画できますので、初めて岩手県まで足を延ばすことにしました。4月28日(木) 仕事を終えてから出発します。阪神高速神戸線、名神高速から北陸道へ、今回も友人から借りたワンボックスが相棒であり宿泊手段となり、福井辺りのSAでの車中泊から始まりました。

29日(金、休日) 北陸道から磐越道(新潟～福島)を經由して東北道へ進みます。あいにくと事故発生、渋滞で前に進めず、東北道二本松ICで一般道へ強制迂回となります。国道4号線を北上し、白石ICから再び東北道にのり一関ICまで走ります。計画した本日残りの行程は一関市～気仙沼市～陸前高田市となっていました。アクシデントにより今夜は一関市内の道の駅での車中泊2日目です。

30日(土)朝、道の駅を出発し、気仙沼市に到着。港周辺は未だ震災・津波の被害を受けた建物が見受けられ、解体作業が行われていました。仮設店舗での営業やかさ上げ工事も確認され、まだまだ復興半ばです。気仙沼は遠洋漁業の港町、港には大型漁船が整然と並んでいます。気仙沼では多くを見ませんでした。本来の目的地、陸前高田市に向かいます。市の入り口には「奇跡の一本松」が保存されています。津波に耐えてたった一本残った松、今は人の手が入り、レプリカとなって保存されています。周囲では堤防工事、かさ上げ工事が行われています。

陸前高田市を訪れた目的は、震災後、診療所を立ち上げた伊東先生にお話を伺うことです。いろいろお話が聞けましたので、陸前高田市の現状、診療所立ち上げの理由、今後のことなどについては次章に整理したいと思います。

陸前高田市を離れて、南下、続いて目的とする南三陸町防災対策庁舎と石巻市の大川小学校の慰霊に向かいます。

南三陸町は平成23年9月 最初の現地支援で訪れました。ボラセンのあったアリーナに立ち寄った後、町内を通るとかつての被災した住居などは整理され、かさ上げ工事が進んでいます。

防災対策庁舎は鉄骨3階建て、海に近く、川のそばにあり、津波が川を伝って襲ってきます。庁舎では住民避難を呼びかけていましたが、把握していた津波情報以上に高い津波の襲来を受け、43人が犠牲となり、助かった人は屋上のアンテナや柵にしがみ付いてのことです。三浦毅さん、遠藤未希さん… 住民に避難を呼びかけ続け、津波を確認した時には、逃げ遅れ、犠牲となりました。佐藤町長も防災対策庁舎に移動後、津波の来襲を受けるも屋上に避難、助かりました。震災後、職員を避難させなかったと、死に至らしめたと訴えられましたが、不起訴処分となりました。町長は言います、「逃げる側は町民、職員は逃がす側に分かります。その役割分担の中で犠牲になった職員がいますが、それによって多くの町民を救うことができたと思っています。津波情報は当初6m、実際には最大24mであった。これでは、残念ながら対応できませんでした」

さて、防災対策庁舎を探すも見つかりません。海に近い志津川地区はかさ上げ工事により、以前の道路も確認できません。ナビを確認、車を降りて周囲を見渡すと屋根らしきものが確認されます。周りがかさ上げされており、防災対策庁舎は囲まれていたんです。近くの空き地に駐車、近づいていくと周りはロープが張られて以前のような献花台もありません。防災対策庁舎の保存については、町としては解体の方針が出ましたが、遺族の一部の声は保存、維持費等は国にお願いするなどにて存続を希望しています。

町として、方針は出たものの処理しきれないのが現状なのでしょうか。
平成27年、今後20年間の庁舎管理を県に移し、震災遺構についての議論を深めることとなった。
とりあえず、瓶を探して持参した花を献花、合掌!!

後ろ髪をひかれながらさらに南下します。
海岸線から北上川沿いに道を移動します。新北上大橋(?)は工事中で対岸に渡れません。
大川小学校は新北上大橋を渡ればすぐそこにあります。
結局、暗くなってしまい、迂回したところ、三陸自動車道近くの道の駅で車中泊3日目となります。

1日(日) 早朝起床、大川小学校に向かいます。
大川小学校は北上川堤防下、川より低い位置にあります。津波の襲来、校庭で父兄の迎えを待つうちに多くの命が失われました。
27年に訪れた際には観光気分と見受けられる人の存在に違和感を覚えました、今回は早朝ということもあり、静寂な中での慰霊を行うことができました。
小学校には慰霊碑が2つ、一つは遺族が建てたお地蔵さま、もう一つは行政が建てた地区の犠牲者を含めての立派な慰霊碑です。
お地蔵さまの設置には遺族のほか、災害派遣できていた自衛官なども協力したと聞きます。
大川小学校の保存については情報がありません。遺族が市を訴えているとは聞いていますが、結審はまだなのかもしれません。これの結果待ちなのかも。
ところが平成28年9月 あるFMで保存が決まったと聞こえてきました。
* 後日の確認です、28年3月に震災遺構としての保存が決定されました。

避難の経過を検証するために市からの説明を受けるも、納得できず、亡くなった児童74名のうち23名の遺族が訴えました。
平成28年10月26日、仙台地裁の判決です。
津波が来ること、避難を市の広報車が呼びかけており、迅速に移動することなく、かつ標高が7mの三角地点と称される場所に避難を進めていたことが惨事の原因である、すぐそばの裏山に早急に避難していれば助かっていたと、裁判所は現場にいた教員の過失を認め、約14億円の支払いを命じる判決を言い渡した。
原告団は一区切りがついたと胸をなでおろし、被告の市側は判決内容を検討し今後の対応を判断するとし、同じく被告の県側は判決にコメントなく犠牲者に対する哀悼を表している。
10月28日 市は高裁への控訴を表明しました。県も控訴を検討中とか…

慰霊後、三陸道、常磐道と南下し、山元町に移動します。
山元町は過去、ボラセン活動に1度、NPO活動に1度訪れており、去年は状況確認に立ち寄りしたものの、活動はしていませんでした。
NPO法人「未来に向かって助け合い」は震災後より活動を行っており、災害復旧活動後は現地の産業等を確保すべく活動しています。
桑畑を作って、桑をお茶にしています。また、かぼちゃのパウダーなんかも作っています。
「山元夢ファーム」ポニー3頭を飼育、ログハウスに屋外ステージを備えて、子供たちの遊び場を提供しています。
歌手の平松愛理さん、何も足を運んでコンサート等の活動をされています。
ここでの活動は、ゴールデンウィークに平松さんのコンサート等を計画しており、その準備のお手伝いです。小雨の中、ステージ等の片付けをしたり、ポニーのお世話をします。

山元町での活動を終えて国道6号線を南下します。
南相馬市の道の駅で車中泊4日目となります。

2日(月) 本日は南相馬市ボラセンでの活動を計画しました。
南相馬市ボラセンにおいての活動は、過去2度行っています。
ところが、前日の小雨の中での活動、雨具着用で汗をかいた処理が悪いせいか、体調が芳しくありません。活動の実施を思案、今回はパスしようと決め、ボラセン活動は中止し、国道6号線を南下します。
活動はパスするも、状況の確認をしたいので南相馬市小高区を周回します。
前年に比べて更地が増えており、帰還に向けての準備が進んでいるのでしょう。

今回の大きな目的は2つ、一つは陸前高田市訪問、もう一つは原発により立ち入りが制限されている地域の国道6号線を通り抜けることです。前年には許可車両のみしか通行できませんでしたが、今回は通過することができます。ただ、二輪車と歩行者は禁止、かつ車外に出ることは禁止されています。このことについては、第4章に整理しています。また、読み返してください。計画では、田村市から郡山市への行程を考えていましたが、国道6号線から田村市に抜ける道は通行止めとなっており、次の目的地の郡山市に行くのにはいわき市まで南下するしかなく、予想以上に時間を要してしまいました。ただ、南相馬市の活動をパスしたおかげで、郡山市到着が深夜にならずに済みました。郡山市内での駐車・宿泊場所を探すも適当な場所はなく、NPOが市街地から少し離れていることもあり、交通量の少ない道脇での車中泊5日目となります。

3日(火) NPO法人「FUKUSHIMA いのちの水」の活動に参加します。NPOについては、第2章でも書いています。代表理事はプロテスタント牧師の坪井さん、私のNPO支援活動は3回目となります。放射能被害から小さな子供たち、妊婦さんを守る活動を行っており、活動の主はミネラルウォーターの無料配布です。最近ではフードロス食品(消費期限が近付いた)を調達し、水と合わせて配布しています。大人に比べて放射能被害が大なる子供、子供のいる家庭の経済的負担の軽減を目的として活動しています。無料配布のほか、子供たちを集めてのイベント、母親たちの意見交換会、放射能に関する講演会開催などの活動も行っています。当日は配布日、午前1クール、午後2クールの配布作業を行いました。NPOへの活動資金カンパ、配布作業を終えて午後7時を超えて、いよいよ帰神の途に付きます。

東北道郡山ICから東北道、磐越道から北陸道へ、富山あたりのPAで最後の車中泊6日目となります。

4日(水) 北陸道、名神高速から阪神高速神戸線と続き、昼過ぎにようやく帰宅となりました。この日は全行程2,400Km、7日間の疲れによりダウンしたのは言うまでもありません。

5日(木) 友人から借りたワンボックスの洗車・清掃です。車に感謝しながら丁寧に洗車・清掃です。車中泊6日もでき、ありがとう、車にも友人にも。こうして7度目の東北支援を終えました。

第7章 陸前高田市では…

伊東紘一先生、カズ子様ご夫妻

済生会陸前高田仮設診療所を設立、被災地を支えられています。
小生も同じ済生会で勤務しており、仮設診療所のことは以前から知っていました。
今回の東北支援、ぜひとも診療所を訪問し、お話を聞かせて頂きたいと考え、
お便りしたところ、先生は快くご了承下さり、4月30日(土)の訪問となりました。

伊東先生、奥様の略歴について簡単にご紹介します。

伊東紘一先生 75歳 超音波診断の発展に寄与されています。自治医科大学名誉教授、
済生会常陸大宮済生会病院名誉院長であり、済生会陸前高田診療所長です。
臨床検査医学のスペシャリストで、地域医療の大切さを説いてきました。

奥様 カズ子様 陸前高田市の旧家ご出身です。東日本大震災でお母様と弟様を
亡くされました。診療所で先生とともに住民のケアにあたられています。
自ら相続する財産などにより、「吉田記念今泉財団」を設立して代表理事となる。
財団は陸前高田の被災地支援を目的としています。

平成23年3月11日 東日本大震災により陸前高田市の沿岸部は壊滅状態となります。
最大津波は17.6m、岩手県内の死者(関連死含む)1602人、行方不明者204人を出しました。
奥様のご実家のあった気仙町今泉地区は沿岸部にあり、この地域も根こそぎ津波にさらわれ、
町の風景は一日で変貌しました。
この中で、お母様、弟様の安否は不明、ご夫妻は確認のため足繁く通われました。
6月のことです、すでに火葬されていた遺骨の一体が、カズ子さんのDNAと一致しました。
お母様です。
警察署で確認された発見当時の写真は、「むごたらしいものでした。くいばったような顔で
主人に聞いたら、これは窒息死だって」とカズ子さんは話されます。
弟様は今も行方不明のままです。

ご夫妻は陸前高田で被災者の支援をするべく、東京での生活を整理して移住されました。
先生はお話の中でこうおっしゃっています、「陸前高田の土になる」…
先生の決意を表したお言葉であり、甚く感銘、小生の心に刻み込まれています。
ご夫妻は、済生会に奥様名義の土地3,000坪と現金を寄付し、済生会は自己の
高松宮基金からの拠出と合わせて診療所や介護福祉施設の開設を計画し、
「地域包括ケアシステムモデル事業」を展開、診療所及び介護施設の運営・管理は
先生が行います。
この事業は平成29年に診療所、介護施設等が開設されスタートします。

先生は診療所等の開設前に、27年10月にプレハブの一角を借りての仮設診療所を立ち上げて
います。東日本の各済生会病院、先生つながりの病院、医院からの応援を受けながら診療を
行っています。
レントゲン機器、血液・生化学検査機器を備えて診療、開始まもなく白血病の患者さんを確認、
専門病院へと引き継いでいます。一般開業医ではできない迅速検査の結果です。
自診療所で出来ない検査、手術などは適切に紹介します。
また、診療所の待合室は地域住民のサロンとなり、奥様がお話し相手となります。
奥様のお話です、「やっと震災のことをお話しされる方がおられます。懐かしい顔を見て、やっと
今まで閉ざしていた心を開いて、涙してお話しされます。」
先生は思っています、震災で傷ついた心のケアの必要性を..

仮設診療所第1号の患者さんは、仮設診療所のある竹駒地区の仮設住宅に暮らす59歳の
男性とその母親です。
今泉地区にあった家が流され、戻りたいが整備が進まず、仮設の生活を続けています。
男性は透析治療中であり、血圧が高いので診察に来られたと言います。
「診療所が今泉にできたら、安心して戻れます」
母親は、「生まれてから今泉を出たことがなかった。戻って1年でもいいから生きられたら」と
お話しています。

仮設診療所でお話を聞かせて頂きましたあと、被災地域、本診療所等の建設予定地をご案内くださいました。

本診療所等の建設は奥様のご実家近くの高台に計画、さらに4mのかさ上げ工事は終了しています。

建設予定地から見る限り今泉地区には建物はありません。

先生はお話しされます、「診療所、施設を作り、これを中心に街づくりを計画している。これで避難した人たちが還ってきます。」

また、医療、介護のみでなく「生活」をケアしての地域包括ケアを考えられています。生活のケアには仕事づくりも含まれていると聞こえます。

保険診療を行うにあたり、自己負担が発生することについては、規則(療養担当規則)により徴収が義務付けられています。

ただ、無料低額診療事業を採用している病院などでは、患者申請、許可により免除、減免できます。済生会はこの事業を行っており、生活困窮者を医療で救済する「施薬救療」を目的としています。先生は考えておられます、被災により生活保護世帯や非課税世帯が多くなった陸前高田市でこの制度を利用することにより、医療が確保できると。

陸前高田でも堤防工事とかさ上げ工事を行っています。

堤防建設は被災者の生活確保より優先されるのでしょうか。

そもそも、堤防を建設したり、平均12mのかさ上げをしても、それを超える津波が来れば防げません。宮古市田老地区の防潮堤、巨大な津波にも耐えられるとの歌い文句でありながら、今回の津波で破壊されてしまいました。

防潮堤に依存していて、避難しなかった住民の死亡が確認されています。

防潮堤により海面が見えない、津波の来襲が見えません。

津波の情報がちゃんと確認されれば、高台等に避難できます。

陸前高田市が指定した避難所でも津波に飲み込まれたところがあります。

24か所の避難所のうち、22か所が被害を受けています。

避難所に居たが、巨大津波の情報により裏山に逃れて助かった方がおられます。

南三陸町防災対策庁舎で住民避難を訴えていた職員たち、津波の情報は5m、10m

そして庁舎から海を見て確認された津波は10mどころではありません。

避難放送を中止して建物の上へと避難します。

庁舎は3階建てですが、津波は庁舎を飲み込み、屋上に逃げたうちの一部の職員のみが助かりました。

このような状況で、防潮堤の必要性、かさ上げの必要性より正確な情報の提供と避難指示が適切に実施されることの方が大切じゃないのでしょうか。

東北出身の議員さんのポロリが聞こえてきます、「津波が20mの情報があったのに提供できていなかった」、この情報が流れていたら犠牲者はより少なかったことでしょう。

津波で元気なのは、堤防工事、かさ上げ工事を請け負う業者であり、一部の市町村職員がご接待に興じているとの話もあります。

皆さんがそうではないでしょうが、本当に防潮堤、かさ上げ工事は必要でしょうか。

少し付け加えます。かさ上げ工事をして地盤が固まる期間は必要でしょう。

土木の専門家ではありませんので正しいのかは判断できませんが、2年～3年はかさ上げた土地には建屋は造れないとも聞こえてきます。

海を見て生活してきた人にとって、海の見えない生活ってどうなのでしょう。

陸前高田のお話からそれますが、平成23年の計画では防潮堤については岩手、宮城と福島の沿岸部594カ所で建設、再整備となっています。

総延長約400km、総工費約1兆円、平成28年1月時点では計画の約14%が完成しています。

防潮堤の高さを巡って、地元の反対が確認されています。

これを受けて専門家が集まる土木学会では、街づくりや景観を考慮した見直し作業を進めての提言がなされ、国土交通省で検討されると聞きます。

防潮堤は高ければ高いほど減殺、災害リスクは減りますが、建設費は膨らみ、海の見えない防潮堤が街の活性化を阻む場合もあります。

土木学会では小委員会を設置、被害を減らせる効果と、人々のなりわいや自然を損なう負の効果を数値化することを検討、これらを合わせた「便益」から「費用」を差し引いた「純便益」が最大となるような高さを検討しています。

東京オリンピックの予算、当初の計画では7,800億円だったかと、今は2兆8,000億かと言っています。小池東京都知事は見直しをしています。
防潮堤工事でも、本当に適切なものが、適切な費用で行われるのかを透明な場で検討することと地元の意見を正しく反映させるべきだと思います。

そして、前の章でお話しをしましたが住民の帰還とインフラのお話です。
陸前高田市では避難した企業等に戻ってもらうべく働き掛けをしています。
どこかの放送局でドキュメントをしていました。
陸前高田を離れて事業を拡大、軌道に乗りました。そんな状況でリスクを背負ってまで還れます?拡大しなくても安定してれば、リスクを覚悟で帰れとは言えません。
そこら辺の問題も整理しないとイケません。住民の帰還が先か、インフラが先か……
きっちりと行政が補償、フォローをしてインフラ整備が先かと思います。

行政の姿勢にも問題が…
現市長は任期が終われば東京(?)に戻る、県からの災害復興担当者も人事異動で県に戻る…
このような人たちが、陸前高田の復興に本気で取り組む姿勢があるのか、疑問の声があります。
仮設から復興住宅に転居しても生活ができず、生活保護を受ける方も多くおられると聞きます。行政が生活できる環境を、仕事づくりも併せて行わなくてはなりません。
行政の仕事は多岐にわたり、相互に関連しますが、行政だから、行政しかできないことがあります。一生懸命取り組んでおられる職員さんもいます。
行政だからできること、行政にしかできないこと、どうぞ震災復興をお願いします。

小生は被災地において合掌を行います。時として、般若心経などを唱えます。
陸前高田 一本松でも合掌などをしました。
先生にお世話になり、失礼な対応をしたかと思ってお礼とお詫びのメールをしました。
奥様に対して、お母様と弟様を亡くされたことに対するお悔やみを申し上げなかったこと、診療所等の建設予定地で、喪失されたご実家に向けて黙とうを行わなかったことを悔やみます。
先生のお返事には、「心の中で掌を合わせてくれれば良いのです。」
またこうも言われます、「医療に英雄は要りません」
先生の言う英雄は「名医」なのでしょうか。
あるインタビューで話をされています。「昔、名医は長い年月の経験が豊富な医師であるとされました。積み重ねがあるから昔の研修医はベテラン医師にはかなわないとされました。しかし、今は変わったのです。CTや超音波診断装置、血液・生化学検査など、世の中にある武器を使って正確な診断に早く到着すれば、今の研修医は昔の名医に対抗できるのです。」
先生の医療に対する姿勢がうかがい知れます。

診療所等の建設は始まっており、29年2月19日診療等の開始予定となっています。
ぜひとも再度の訪問を計画したいと思います。
先生の計画に皆さんがもろ手を挙げての賛成ではなかったとも聞きます。
これからのいろいろな問題が現れるかと思いますが、乗り越えられて、先生の理想の「棺桶に入る前日まで医者として働く」を貫いてください。
先生は笑って言います、「本診療所ができれば20年は死ねないなあ」

陸前高田市の話をしたので、現地で活躍するNPO法人をご紹介します。
NPO法人「SET」
活動拠点は広田町、広田町は海にせりだしており、津波の被害も甚大でした。
理事長の三井俊介さん、大学生のころから広田町の支援活動を行っておられます。
移住後に結婚されたのかな、1歳半のお子様のパパです。
そして、陸前高田市の最年少市議でもあります。

活動は地元の方と外部の若者の挑戦の場を創り出すことで、「自分と向き合い、本気で人生を走る人」を増やします。浜野菜の流通、パソコン教室、グッズの販売と広田町で事業を起こしたい方やプロジェクト設立の企画支援、運営支援を行います。
三井さんの他にも3名の方が移住されています。広田町を元気にする活動は続きます。

私がレポートを書くにあたり、東北に行き、自分の目で見て感じたこと、現地の人のお話を聞いたこと、新聞やネットからの情報を整理しています。
レポートの内容が100%正しいとは思っていませんので、読まれた方はご自身で
ご判断をお願いします。

ここで豆知識をお話しします。

陸前高田診療所長 伊東先生に教えていただきました。

「海嘯(かいしょう)」河口に入る潮波が垂直壁となって河を逆流する現象です。潮津波とも呼ばれています。昭和初期までは、地震による津波も海嘯と呼ばれていました。波形から段波(だんぱ)と呼ばれる形状構造をとっているため、波の前面での破壊力が大きい。

第8章 心的外傷後ストレス障害(PTSD)と戦うNPO

第7章では陸前高田市に触れていますが、同じ陸前高田市で活動する他のNPOを紹介します。

今までのレポートでは、PTSDについて触れていませんでした。
震災後、子供が親から離れない、やみを怖がる等については認識していました。
災害後、避難所などでの心理面でのサポートの必要性、サポートチームの活動については触れていましたが、東北震災では少し状況が違っていました。
震災は日中、多くは学校に居る時間に発生しています。
必然と学校に行くと震災の悲惨な出来事に怯える、不登校になってしまう。
東北震災後、5年を経過した現在でもPTSDを克服できない現実がありました。

心的外傷後ストレス障害(PTSD)について説明します。
命の安全が脅かされるような出来事、戦争、天災、事故、犯罪、虐待等によって強い精神的衝動を受けることが原因で、著しい苦痛や、生活機能の障害をもたらしているストレス障害です。

あるFMラジオで、陸前高田市のNPO「マザーリンク・ジャパン」が紹介されていました。
震災によりPTSD、学校に行けなくなった子供たち、その家庭を支援しています。

学校にいて地震、津波により、命が亡くなり、町が破壊されるのを目の当たりにした子供たち、大人でもPTSDになるのに、子供たちなら尚更です。
夜も眠れない、親から離れられない、そして学校には当時の記憶が残っています。
このことから学校に行けない不登校が始まります。そして、親から離れられないので、仕事に行けないことから貧困は始まります。
貧困家庭の多くは母子家庭であり、NPO「マザーリンク・ジャパン」はその支援を行っています。

その支援活動は

- ・PTSD、不登校についての勉強会や相談
- ・支援活動に関するイベントの開催
- ・貧困母子家庭への食糧等の支援
- ・フリースクールを開校
- ・ご自宅訪問、支援についての紹介 etc…

不登校ゆえに勉強が遅れる、子供の将来のためにフリースクールで救済をします。
PTSDから少しでも立ち直るべく心のケアを行います。
仕事に行けない環境から貧困に、就労支援の一環としてパソコン指導を行い、職を探す、少しでも収入が上がるようにと計画されています。

NPOの活動には、貧困母子家庭を支援することとNPO活動を支えるボランティアが必要です。
マザーリンク・ジャパンの願いは「いつの時代でも、どこに生まれても、すべての子どもにとって、子ども時代が幸せなものであるように」
活動に直接参加されるもよし、資金などの援助をされるもよし、何らかの形での支援をお願いしたいと思います。

あまり多くのことを書けませんでした。本章の最後に代表者のお話の中で気になったことをご紹介します。

「多くの貧困家庭では、生活保護の受給家庭が少ないことがわかりました。」
「訪問してわかりました。仮設生活3年、ずっと1日1食の生活の家庭が多いことに」
以前レポートでも生活保護制度のことに触れています。
本当にまじめに生きてきた、でも体を壊したりなどで働けなくなったの貧困、胸を張って保護を受給してください。ちゃらんぼらん生きてきて生活できなくなった、何らかの制約を受けたうえで謙虚に受給してください。
子どもたちがいるなら可能な限りの親の支援を行い、足らずを生活保護で補助しましょう。
貴方たちを育ててくれた親の面倒、恩を返すのは当たり前でしょう。

まじめに生きてきた人が報われる社会であって欲しいと願います。

第9章 国民の最強の応援団、天皇陛下

私は右翼でも天皇崇拝者でもありません。ただ、少し右寄りの考えをすることはゆがめません。天皇陛下については過去の東北レポートでも触れており、重複する内容もありますが、さる8月8日の陛下のビデオメッセージが流されたのを機に、もう一度お話してみたいと思います。

天皇は、憲法では「国民の象徴」として位置付けられています。天皇陛下、皇后陛下は、国事行為のほかに、ありとあらゆる機会に国民に寄り添われます。戦没者の追悼、慰霊のために海外に出かけられたり、阪神・淡路大震災、東日本大震災、そして、熊本震災などの被災地の慰霊と被災者のお見舞いは欠かされません。かつ、その臨み様はまさに真摯なものであります。

被災地訪問の話です。避難所の体育館を訪れた際、被災者がスリッパをはいていないのを確認されると、随行に勧められるもスリッパをおはきになりませんでした。被災者に声を掛けられるのも、目線を合わすように膝を折られることもあります。随行に時間を伝えられても、話を折ることもなく耳を傾けられます。そして、沿道にお迎え、お見送りの住民が確認されると、揺れるマイクロバスの中で手すりを持ちながら、随行が座ることを勧めても「少しでも姿が見えるように」と立たることもあります。

東日本大震災時、現地での電力が制限されると皇居でも自ら制限を行われました。

両陛下ともご高齢にかかわらず、本当に国民に寄り添い、国民とともにあることを真摯に知らしめてくださいます。天皇陛下は、平成15年前立腺がんにて手術を、平成24年冠動脈のバイパス手術を受けられています。このような健康状態のなか、国民に全身全霊にて向かい合われます。

この後の生前退位の問題と時期的に前後しますが、平成28年9月28日～10月2日まで、両陛下は岩手国民体育大会と東日本大震災の復興状況視察に出かけられました。4泊5日という長期間であります。国民に寄り添うことに全身全霊で向き合われます現れだと思えます。来春にはベトナム訪問の計画を検討されているとのこと。

そしてさかのぼって、平成28年7月に生前退位のご意向との報道がされました。宮内庁は否定するものの、8月8日には陛下のビデオメッセージが国民に発せられました。メッセージでは生前退位という言葉には触れず、政治にかかわるような発言も控えられましたが、ご高齢により国民の象徴としての国事行為、その他のことが困難となっておられることが、よく伝わってきます。陛下には戦争についての区切り、戦後60周年にサイパン、70周年にはパラオへの慰霊の旅をされたことも考えられてのことかと思われ。本当に真摯に向き合われるので、手を抜くことができないご様子がかうかがい知れます。

崩御と新帝の着位に伴う過度のスケジュールは残された者の負担となることを憂慮されています。また皇太子さまや秋篠宮さまが、自身の姿勢を受け継いで天皇として、皇族としての務めを果たされることを確信してお話であったかと思えます。

以前には、墓陵のこと、土葬でなく火葬にと、国民の負担が過度にならないようにとのご発言もありました。

生前退位ではなく、摂政(天皇が何らかの理由により、務めを行うことができない場合において、代わってそれを行うことができる役職)をおけばよいとの意見もあります。ただ、天皇陛下には摂政を置くお考えはないように思えます。

生前退位については、「皇室典範」などの改正が必要となり、国会での議決を要します。
さらに、生前退位が可能となれば、何らかの圧力による生前退位が、好ましくない生前退位がなされる危険も考えられます。
また、引き継がれる方が国民の象徴として値されるような方でないといけません。

天皇陛下は全身全霊で国民に向き合うことができなければ、象徴としての務めは果たせないのです、退位するべきであり、後進(皇太子)に道を譲りたいとお考えでありましょう。
皇太子さまは天皇陛下のように温和、にこやかに、かつ真摯な立ち居振る舞いをされます。
ご家庭も大切になさっておられるようで、引き継がれるには問題はないかとも思われます。
お年は56歳になられるかと思えます、天皇陛下が着位されたお年とほぼ同じです。
天皇陛下がご退位をされるかと思われる(推測される)平成30年には58歳となります。
今後のご活躍を考えれば、天皇陛下のお考えは素晴らしいことかと思えます。
イギリスでは生前退位の考えはなく、チャールズ皇太子もご高齢(1948年生)とされています。
他の欧州王国では生前退位をされる皇室もあります。

政府、国民は天皇陛下のご意向を大切に、天皇が国民の象徴として国民に寄り添い、国民が天皇を心のよりどころであり続けられるような環境を作り上げることが大切です。
どうぞ皆さん、真摯にお考え、お取り組み下さい。

日本国民にとって、天皇陛下こそが最強の応援団であるとの思いから、あえてこのレポートで意見を述べさせていただきました。
一部の心もとない人が言っています、「天皇陛下の被災地訪問は、現地の対応職員や被災者の負担になっている」
そうでしょうか、陛下は訪問の時期を適切に判断し、現地対応者の負担や被災者の気持ちを考えて行動されています。
いろいろなことを、関係者からお聞きにもなっており、それを踏まえてのご判断でしょう。
天皇・皇后両陛下の被災地でのお振る舞いについては、以前から書かせて頂いています。
お言葉を掛けられた被災者の話を聞いても、決して迷惑でなく、心の支えとなっています。
両陛下のご訪問を受けた後の避難所では、空気が一変したと皆は言います。
心を閉ざし、重く沈んでいた気持ちが、前向きに、たくさんの人と語り合い、手を携えていこうと思えたと言います。

そして、天皇陛下は最強の応援団に違いありませんが、芸能界などにも応援団はいます。
熊本震災では、両翼は水前寺清子さんと八代亜紀さんたちです。お二人は熊本出身です。
八代さんは熊本で復興コンサートをされました。
いつでも駆けつける石原軍団、解散が決定なSMAP 中居さんも被災地での活動を行っています。

東北でもそうですが、芸能界、スポーツ界と応援団は存在します。
被災された方、決して貴方たちを忘れることなく、応援団がいます。
忘れていません、ともに前に歩んでいきましょう。

第10章 アスリート応援団

芸能界では、郡山市出身 俳優 西田敏行、仙台市出身 漫才コンビ サンドイッチマン、女川町出身 俳優 中村雅俊さんたちが、故郷の復興に活動をしています。

スポーツ界でも東北出身者や、ゆかりのあるアスリートが支援活動をしています。先日結婚した卓球の福原愛、スケートの羽生結弦、プロ野球 東北楽天のメンバー……

今回のレポートでは、以前にご紹介していないアスリートのお話をします。

○香川真司 ご存知のサッカー選手です。小学校まで神戸で、そして中学、高校は仙台でサッカーを続けました。

香川選手の活躍の原点は、キング カズ(三浦知良選手)の姿を見たからと言います。阪神淡路大震災時、香川選手の居た神戸市垂水区 乙木小学校にカズが訪問、その姿にあこがれ、サッカー選手への夢は膨らみます。

神戸もしかり、東北でも子供の笑顔が見たい、自身の成長を育んでくれた故郷に恩返しをしたい..サッカーを通じて定期的に被災地の支援を行っています。

○平野恵里子(23歳) 岩手県大槌町出身、7人制ラグビーの選手です。

大槌町はラグビーの盛んな釜石市に隣接、ラグビー経験のある父親の影響で、小学生からラグビースクールに通っていました。

高校は釜石高校、男子に交じって楯円のボールを追いかける生活を続けます。女子7人制の日本代表に照準を定めて目指した大学進学前、あの震災です。故郷の変わり果てた惨状に「こんな状態で東京には行けない」と母につたえると、母は「お前がやるべきことはラグビーだろ」と一喝されたと言う。

大学3年で日本選抜のメンバーに、一昨年は練習中の右膝のけがのため代表候補から外れた。昨年の夏からは練習ができるようになったが、27年11月 代表チームが五輪出場を決めたゲームはスタンドから見守った。代表入りをあきらめず、「家族を含め、多くの人がまだ仮設で生活している。五輪に出て地元を元気にしたい」と練習に励んでいる。

以上は28年3月の新聞記事です。リオ五輪のメンバーを確認しましたが、平野選手の名前はありませんでした。東京を目指せ!

○加藤由希子(22歳) 宮城県気仙沼市出身、パラリンピックやり投げ代表を目指しています。生まれつき左ひじから先がなく、義手をつけて育った。スポーツ好きで、中学の担任の勧めで砲丸投げを始めたという。生まれつきの肩の強さで、記録はぐんぐん伸び、大学時代には世界記録をたたき出しました。

高校2年、あの震災です。高台の学校で練習中、眼下の町は津波で家が流され、真っ赤な炎が燃え上っていた。

家族と再会できたのは二週間後、家は全壊した。

避難所生活で思うように練習ができず、体重は10kg減少、高校総体の出場を逃しました。

震災での悔しさを乗り越えての大学、社会人での活躍、パラリンピックでは本来の砲丸投げ(競技には砲丸投げは採用されていない)でなく、やり投げでの代表を目指している。「震災で強くなった姿を最高の舞台でみせて、気仙沼に元気を与えたい」

以上は28年3月の新聞記事です。リオパラリンピックのメンバーを確認しましたが、加藤選手の名前は確認されませんでした。残念!

○赤間謙(25歳) 福島県檜葉町出身、プロ野球オリックスの新人投手です。
原発事故により町の大半が避難、野球ができることに感謝を込めて、グローブには「2011.3.11」と刺繍を入れてマウンドに立ちます。
「被災地に明るい話題を届けたい」と活躍を誓います。

震災時は、東海大に在学、沖縄でキャンプ中でした。家族は無事ながら実家は半壊、原発事故により家族は分かれての生活を余儀なくされます。
故郷の惨事、家族の避難の状況において、はたして野球を続けていいものだろうかと悩みます。父親の「家業(左官業)は継がなくてもよい」の言葉に背中を押され、「自分ができることは野球しかない」と覚悟を決めます。

成績が芳しくなくても、「好きなことで悩むなんて幸せだ」と言い聞かせます。
このことを忘れないために、グローブにあの日を刺繍し続けます。
震災から4年を過ぎた12月に初めて檜葉町に、解体中の実家には入れず、車から眺めるだけ。
かつての通学路に人通りもなく寂しさが募ります。
松本町長から、「君が頑張ることで、喜んでくれる人がいる」と激励され、自分にどれだけのことができるか分からないも、頑張ることで少しでも勇気を与えられたらと思う。
1.17には球団職員とともに、決意を胸に、阪神淡路に追悼の黙とうを捧げたと聞きます。

28年のペナント ドラ9位指名の新人ながら、24試合 打者155人 被打率 2割5厘の成績を残しています。

○星孝典(34歳) 宮城県名取市出身、元プロ野球選手(捕手)です。
リトルリーグから仙台育英高に進学、平成11年、12年に夏の甲子園に出場、東北学院大に進む。
平成16年のドラフト6巡目で巨人に指名されてプロ入りをする。7年後にトレードで西武に、平成28年シーズン終了とともに現役に別れを告げました。

平成28年の元旦、震災後初めて名取市の北釜海岸で家族とともに初日の出を見ました。
昔はよく来ていたと言う。特に意味は無いと言うが、静かに海面を見ながら5年前の震災を思い出した。

津波は生まれ育った実家をのみ込み、祖父、祖母の遺体は自宅から約1km離れた場所で見つかった。「海の景色は昔と変わらないが、後ろを振り返ると何も無い。海岸に向かうまでの風景もすべてが変わってしまった」

震災3年半後、元あった場所から約4.5km離れた場所に実家は完成、シーズン遠征で仙台を訪れると、祖父母の眠る墓前で手を合わせ、いかに被災地を支えていこうかを考える。

時間の経過が心の傷を癒す、皆がそうではありません。
今になって心が病んでしまう人も、病み続けている人も。
物質的なサポートから、これまで以上の「心のサポート」が必要だと実感したと言う。
「プロ野球選手として何ができるのだろう。やりたいことはあるけれど、押しつけになってはいけない。本当に求められていることは何なのか、ずっと考えています」

子どもたちへの野球教室を続ける、子供たちがどんな時でも下を向かず、夢をもって生きる目的、活力を持てるような一助になりたい。
野球だけでなく、いろいろなジャンルの垣根を超えた活動で被災地を支えたいと言う。

「震災は“過去”ではない。一生向き合っていきます」
地元の風景は変わってしまったが、星の被災地への思いが変わることはない。

○鈴木尚広(37歳) 福島県相馬市出身、元プロ野球選手です。
足のスペシャリストとしてご存知の方が多くと思います。28年のシーズンを最後に巨人で現役のユニフォームを脱ぎます。

「被災地出身の選手として、率先して表に出ていくのが使命」と語ります。
プロ20年を過ごしたベテランは、被災地、仮設住宅の訪問、東京ドームに子供たちを招待します。
オフにはチャリティイベントに参加、収益の一部を寄付します。
「プレーだけでなく、支援活動をしながらか『福島に対する思いを忘れていないよ』と伝えるのが使命だと思う」

故郷 相馬には未だ、震災の傷跡が残る。友人も、なれ親しんだ街も一瞬にして無残な姿に変わった。震災以降、復興について忘れたことはないと言う。

「これからも良い情報を発信続ける」、盗塁成功率歴代一位の鈴木は、震災を風化させないという使命を背負い続ける。

○小笠原満男(36歳) 岩手県盛岡市出身、サッカーJ1リーガーです。
復興支援活動を行う「東北人魂を持つJ選手の会」の発起人の一人です。

盛岡市出身ですが、高校時代を過ごした同県大船渡市の甚大な被害に、復興への思いは人一倍強い。
「とてもじゃないけど、復興したと言える状況ではない。ずっと仮設で暮らす方もいる。なんの不自由もない生活をしてきた自分たちとは全然違うと思う」と神妙に語る。

サッカー教室などで東北に足を運ぶうちに、子供たちの変化に気付きました。
「津波の記憶があるという子が減ってきている。震災後に生まれた子もいる。あの津波と地震はいつか、また来る。いかに語り継いでいくかが大切だ」と言い、その使命感を感じている。

「競技場に足を運ばず、テレビでゲームを観ている人もいる。『楽しかった、また明日から頑張ろう』と思ってもらえるような試合をしたい」と意気込みを語ります。

○室伏広治(42歳) 静岡県沼津市出身、元ハンマー投げ選手です。
ご存知の通り、ハンマー投げで数々の記録を残したアスリートです。
現在は、東京医科歯科大学の教授で、被災者に寄り添ってきました。

震災以前から、宮城県石巻市で陸上教室に訪れ、地元の子どもたちとの交流が続いています。
被災地での震災による心の傷に憂いを隠せません。
「隣にいた人が亡くなって、その姿が毎日夢に出てくるという話を聞いた。心の傷は深い」

忘れられない、教えてもらったことは、震災後3ヶ月に訪れた時のことだ。
沈んだ子供たちの表情が、リレー競争を始めると、自然と応援の声が上がり、笑顔になった。
「スポーツには力があると学び、この子たちをもっとも元気付けられるのは何だろうかと考えた」

引退もささやかれていた中で、金メダルを取ることを約束し、2011年(平成23年)世界選手権で約束通りに頂点に立った。
「メダルを取ってくるから、君たちも頑張れ。(自分の現状、努力をしないと取得が困難な)メダルのことを言わなければ、それぐらいのことを言わなければ、子供たちに頑張れとは言えなかった」、競技が自分だけのものではなくなった瞬間だった。

大会後、友人を亡くした中学生からの手紙です。
「やれば乗り越えられるということを見せてくれて、ありがとうございます。頑張ります」うれしく目を通したと言う。

今は、石巻の子どもたちと貸与されている東京五輪の聖火台を磨きながら、考えている。
子どもの夢を育て、被災地からオリンピックを出し、メダリストとなることが、競技団体として被災地復興の大切な仕事だと…

2020東京五輪では、海外の多くのアスリートに東北に足を運んでほしいと願う。
これからも被災者に寄り添って、復興へ団結する日本人の素晴らしさを世界に発信続けると言う。

○田部井淳子(77歳) 福島県三春町出身、女性アルピニストです。
女性で世界初のエベレスト登頂など輝かしい登山歴を残し、登山を通じての社会貢献活動を行っています。気さくな性格で人からも愛されました。
山へのあくなき希望・愛着と故郷を思う心を持ち続けます。

東北震災、原発事故からの避難者は三春町にも来ています。
そんな人たちとさまざまな活動を通じて、励まし、勇気を与えます。

平成23年6月ころから、被災者とハイキングに行く活動を60回以上続けています。
一緒に活動を企画した福島県大熊町社会福祉協議会会長の渡部さんはこう言います、
「避難中の町民がどれほど励まされたかわからない」
葛尾村から避難してきた永沢さんです、「山に連れて行ってもらって、いやなことを忘れられた。
手作りの梅干しをくれたり、草花の説明をしてくれました。」

また、毎年、高校生たちと富士山登山を行います。
故郷の復興への思い入れが強く、「若い世代が元気になれば必ず復興できる」と
富士山登山の意義を語ります。

「さあまた登れ、一步を。いつか必ずこの一步が終わる時が来る」
エベレストの登頂記には、頂上目前の心境をこうつぶっています。
どんな高い目標でも、歩みを止めなければ、必ずたどり着く。
がんを患いながら、身長150cm余りの体には、決して折れることのない心が秘められていた。

復興はあきらめずに、少しづつでも前に歩いて行こうとのメッセージです。
残念ながら、田部井さんは平成28年10月20日 77歳でお亡くなりになりました。
ご冥福をお祈りいたします、合掌!

まだまだ紹介しきれないアスリートたちはいます。
今後、またの機会があればご紹介したいと思います。

第11章 ボランティアと派遣職員

被災地の復興には、いろいろな人がかかわっています。
ボランティアばかり、全国の市町村職員からの派遣職員ばかり……

福島原発事故が収束したとは思っていませんが、6年を迎えようとしている今、安全性に疑問を持っていますが、原発避難から帰還へと進んでいます。
南相馬市でボランティアをしましたが、今までは住宅が野放しで朽ちていくのが堪えられない、避難住民の気持ちをおもんばかっての活動(家財の運び出し、草刈etc..)でしたが、これからは帰還を目的とする活動に切り替わります。
この切り替わった活動には、やっぱり多くのボランティアが必要となります。

新聞情報では、東北ボランティア参加人数の最高は平成23年5月で 182,400人となっており、近々の平成28年1月では 2,400人となっています。
もっとも、宮城や岩手では仮設住宅は残るものの、がれきの撤去などの活動はなく、生活支援が必要なだけとなっています。
これに対して、福島では帰還に向けての住宅の整理、改修などを行わなくてはならず、まだまだボランティアの活動が必要となります。

また、全国の自治体からの派遣職員は、被災地では各部門のプロフェッショナルとして復興には欠かせません。
警察職員、消防職員を除く平成27年10月1日現在の自治体からの派遣職員は、東北3県で宮城県 1,145人 岩手県 655人 福島県 398人の合計 2,198人となっています。
施工の必要性は別として、宮城、岩手では防波堤やかさ上げ工事のためのプロ、そして街づくりのプロが必要となります。震災による増えた業務のため、地元職員とともに派遣職員の活躍が必要となります。

○ボランティアの状況

前述しているように、岩手、宮城では災害ボランティアのニーズはなくなっており、仮設住宅で生活する高齢者などに対する生活支援ボランティアを必要としています。
健康問題(医療、介護..)、生活に必要な援助(買い物、外出時の同伴..)、恒久住宅への引っ越しや震災で傷ついた心のケアを行うボランティアも必要とされています。

これに対して福島では、原発事故による避難から帰還に向けての、災害ボランティアも生活支援もまだまだ必要とされています。

毎年、東北へ出かけますが、自分の目で見て本当にそう思います。
熊本地震の支援に出かけましたが、熊本では局地的であり、かつ地震という要因だけであり復興に何年もの時間を要することはないかと思えます。
これに比べて、地震、津波、原発事故と複数の要因があいまった東北では、その復興は精神面も含めて困難を呈しています。

どうぞ、もうすぐ6年が経過するし大丈夫だろうと言わず、東北へ足を延ばしてください。
できることで構いません、復興に向けて支援をお願いします。

○派遣職員としての希望が通らず、被災地の臨時職員に

富田林市の元総務部次長 田中敬一さん(59歳)
総務・企画畑での経歴、防災や復興に携わった経験はないが、被災地での行政機能がマヒしていることを報道で知り、派遣職員として名乗り出るも、市ではポスト不在等により許してもらえなかった。こっそりと岩手県の臨時職員採用試験に応募、基礎教養等で1回目は不合格、勉強して2回目では合格となった。
震災後半年、プライベートで岩手県大槌町を訪問し、見渡す限りのがれきの山、倒れた電柱、生れて初めて見る悲惨な光景に、現在の職を投げ捨てても被災地の立て直しを決意したという。

もちろん市としては慰留するも、田中さんの決意は固く、平成25年3月 野田村という人口3,000人足らずの村に派遣、総務課での役職は「主事」、かつての総務部次長とは比べようもなく低く、給料も半減した。
即戦力として経験を生かせる場、被災地の立て直しができる、お仕着せの仕事で済ませないと、自らのスタイル、信念を実行した。

町では地域防災計画の作成を担当、住民や職員から震災当時のことを聞き取り、将来に向かっての対策作成に携わっている。
また、追悼式の実施において、遺族より来賓の献花が先に行われることに疑問を感じ、誰のための追悼式かと声を上げ、プログラムの変更に至った。
住民に寄り添い、野田町の復興の一翼、一翼どころでない活躍をしている。

臨時職員としての任期は平成30年2月まで、村役場職員92人のうち 4分の1は応援職員、今後も続くであろう復興の担い手として若い職員の育成にも力をいれている。

慰留されるも富田林市を辞めたという後ろめたさはあるものの、精一杯 東北で仕事をするのが市への恩返しになると信じている。

本当に東北では復興は終わっていません。
震災を風化することなく、息の長い支援をお願いします。

第12章 最後の砦 自衛隊

災害活動において、自衛隊の存在を無くしては語れません。
阪神淡路で日の目が当たり、以降は震災、台風等の災害の対応に遺憾なく活躍しています。
隊員たちは言います、「自衛隊は日本の最後の砦である」

近年、防衛問題が盛んに取り上げられ、自衛隊の位置づけも変化し、その活動に憲法改正も論じられています。災害活動だけでなく、防衛問題、国際貢献においても、自衛隊の活動は日本の最後の砦です。自衛隊が有効に活動できるべく、位置づけができるように願っています。

28年6月26日 NHKの討論会で共産党政策委員長の発言です。

「防衛費は人を殺すための予算です」

共産党志位委員長は、「自衛隊は憲法違反、将来は解散する。だけど、災害時には活用するし、防衛出動もさせる」と言っています。

防衛費には自衛官の俸給が含まれています。彼らを人殺しと言っています。

だのに、今は災害活動をさせるし、有事の際の防衛出動もさせるなんて、支離滅裂な意見です。仮に解散させた後の災害活動、防衛出動については、どう考えてるのでしょうか。

過去のレポートでは当然、自衛隊の活動について記述しましたが、今回、改めて整理したいと思います。

東日本大震災では、自衛隊史上初の「統合任務部隊」が編成され、一人の指揮官のもとに陸上、海上、航空自衛隊が結集して活動しました。

この指揮官は、当時の陸上自衛隊東北方面総監・陸将 君塚栄治氏です。

「先憂後楽」と言って部下を鼓舞し、犠牲者、被災者を第一としました。

その後、陸上幕僚長に就任、自衛官退任後は防災アドバイザーとして活躍、

平成27年12月28日 63歳の短い人生を終えました。謹んでお悔やみ申し上げます。

航空自衛隊では、災害発生直後から活動を開始、空から被災状況の確認を行います。
火災に対して消火活動を行うも、ビルなどの屋上に孤立した被災者を発見すると救出を優先します。

空自三沢ヘリコプター空輸隊 浜砂三佐は震災翌日、12日早朝から山林火災消火のため海水のくみ上げと投下を繰り返しながら、市街地の惨状に「恐ろしい…」と思わず声が出た。作業の途中で乗務員がビル屋上に人影を発見、搭乗していた「CH47」は輸送ヘリでありながらつり上げ訓練も行っていたし、乗務員の機転で救助器具も搭載していたこともあり、ためらず指揮所に「救助を実施したい」と伝え、了承後、初めての救助活動を行った。

48人を救助後、向かったのは大槌町の植田医院だった。

家族、近所の人たち18人が一晩、屋上で津波から身を守り取り残されていたのである。

午前10時20分頃、ビル上空でホバリング開始、植田さんの母親ら6人を機内に収容したところで基地へ戻る分の燃料しかない「ビンゴフューエル」の状態となり、救助を打ち切り、

三沢に戻った。残された12人は、続けて到着した別の空輸隊ヘリが救出した。

翌13日にも釜石市鶴住居地区防災センターでも救助活動を行った。

浜砂三佐は14年に鶴住居地区防災センター跡を訪れ、献花台に花を手向けた。

「常に不測の事態を想定した訓練が必要だ」と自分に言い聞かせ続ける。

航空自衛隊は消火活動、救助活動、情報収集、物資輸送と多岐にわたる活動を行い、原発事故においても放水活動を行いました。

海上自衛隊は震災直後、航行可能な全艦船を東北地方に急派、ミサイル迎撃システムを持つイージス艦も例外ではなかった。

横須賀地方総監 高嶋博視(ひろみ)海将は海災部隊指揮官となる。

遭難者の捜索・救助、物資の輸送、損壊した港の調査等を行う。

13日午前11時12分 福島県沖で捜索中のイージス艦「ちょうかい」の艦橋にいた吉田三曹の双眼鏡は、洋上を漂う板の上の人影をとらえた。

航海指揮官 大峰3佐は「救助に向かう!」と号令後、自ら小型ボートに移り乗った。

瓦礫を避けながら慎重に進み、遭難者を励まし続けながらボートに収容した。

南相馬市の65歳男性、2日間栄養ドリンク2本で漂流、命をつないでいた。

大峰3佐は「耐え抜いてくれたことに勇気をもらい、艦の士気は上がった」と語ります。

小型ボートの操舵手 滝石3曹は、「多数の漂流物を想定した訓練が必要だった」と感じ、

日頃の訓練で後輩たちに経験と教訓を語っています。

海上自衛隊においても、原発事故での放水活動を行っています。

さて人数が一番多い陸上自衛隊です。

阪神淡路大震災では、偵察活動と称して命令前に活動を起こした第3師団、

東日本大震災でも当時の陸上幕僚長 火箱陸将は大臣命令を待たずして派遣指示を

したと聞きます。

「規則に触れるとの自覚はあったが、一秒でも早く被災地に行かせることが重要と思った」

宮城県多賀城市 多賀城駐屯地司令(第22普通科連隊長)國友1佐は、避難者の受け入れを

独断で判断しています。

自衛隊の活動にはシビリアンコントロールは必要ですが、臨機応変な対応も大切です。

13日午前、宮城県大和町の第6戦車大隊 千葉准尉、島田3曹たち30人は、石巻工業港周辺で捜索活動を行います。

がれきの下、屋根の上、水浸しの街を歩くと遺体が次々に目に入った。

雪がちらつく中、胸まで水に浸かりながら、がれきの中を声を振り絞って捜索します。

「自衛隊です! 誰かいませんか?」

子どもをかばうように抱えたままの女性の遺体、寝たきりの高齢男性の傍らには妻であろう

息絶えた女性の遺体、胸を切り裂くような悲惨な現状にもめげず、捜索を続けます。

隊員たちもかつてない惨状に言葉を失い、千葉准尉は部下の精神面を気遣いながらも

鼓舞します。

災害発生「72時間」、救助率が格段と下がるこの72時間は14日の午後となります。

4か月の彩花(いろは)ちゃん、ご両親と隣のお家の2階に避難、津波は1階を飲み込み、2階床に

達する直前で止まった。夜が明けても深さ1mの水が家を取り巻き、孤立している。

母親はペットボトルの水でミルクを溶き、手で哺乳瓶をこすって温める。

4日目、水の引いた家の周りに自衛隊が集まってきた。ピンクのおくるみに包まれた

彩花ちゃんは、お父さんの手から隊員に委ねられた。

「よく生きていてくれた」一家の救出に加わった島田3曹はうれしかった。

いつもレポートで触れる石巻市の大川小学校、児童・教職員84人が死亡、

行方不明になりました。

高知県香南市の第50普通科連隊の85人が3月19日から不明者の捜索を本格化させました。

中隊長 宇郷3佐は、「雪が降る被災地で沼地に入ってから作業は体が震えた」と話す。

22日、少女の遺体を発見、4年生だった。学校そばにへ運ぶと、我が子を探す父母が集まって来、

「〇〇ちゃんだ」 大声で泣き叫び、すすり泣く残酷な再会の場面は隊員たちにとって、

見ていられないほどつらかった。

行方不明者の捜索と亡くなった人の思い出を掘り起こした第50普通科連隊の68日間、

60人以上のご遺体を収容した。

隊員の精神的変調を確認すると活動から外し、毎日の活動後は黙とうと話し合うことによって

精神的ストレスをためないように注意したと振り返る。

自衛隊は人命救助 19,286人、遺体収容 9,505人、物資輸送 13,906t 等の活躍をし、最大時の派遣人員は 107,000人であった。

本章の最後に、東日本大震災で明らかとなった問題があります。
多くの車両を運ぶ輸送船の少なさです。北海道からの陸上自衛隊車両の運搬は、米軍の協力や民間フェリーを借り上げて行いました。
これを受けて、民間フェリー会社と契約を実施、有事における優先利用の手段が検討されます。
平成28年3月、有事の際に使われる民間フェリー2隻を有する特別目的会社(SPC)が民間の出資で設立されました。
船員組合は「事実上の徴用だ」と反発する中、一歩踏み出すことができました。
平時は民間事業と訓練のための移動に使われ、有事には自衛隊隊員や武器の輸送に使う。フェリーの操船は予備自衛官を充てるとし、予備自衛官制度を見直し、自衛官歴が無くても予備自衛官に志願できるように検討されている。
28年9月 北朝鮮のミサイル発射に際し、SPC所有のフェリーによる武器の移動を試みるも船員組合の反対により頓挫している。
操船ができる予備自衛官の確保が急務である。

第13章 トモダチ作戦

言わずと知れたアメリカ軍が東日本大震災において、行った活動である。

11日の地震発生後、駐日大使 ジョン・ルースはすぐにオバマ大統領、クリントン国務長官と話し、可能な限りの支援の指示を取り付け、在日米軍司令官に連絡、自衛隊との連携を取り最大限の活動を協議した。

行方不明者の捜索、物資の輸送、自衛隊員・車両の輸送と原発事故への対応協力etc..
その数は、最大時24,000人とされている。

韓国との合同演習に向かっていた空母「ロナルド・レーガン」を三陸沖に派遣、訓練用の物資のみならず、乗組員の私物(子供へのお土産のおもちゃ等)も提供されたと聞く。13日には、ロナルド・レーガンを含む9隻の艦艇が三陸沖で活動を展開している。

空母については以前のレポートでも触れていますが、医療施設、宿泊施設などを十分に確保できます。また、ヘリコプターなどの運用もできるため、災害ではいかにその威力を発揮できます。

日本は専守防衛なので、空母は必要なしとされています。

ただ、現実としてヘリ搭載型護衛艦は存在します。

最近では甲板が戦闘機が発着陸できるような設計となっており、空母だとも、空母でないとかの意見がありますが、大きさ、数も十分とは言えないかと思います。

国防問題では南西に重点をシフトする方針でもあり、いざという時を考えれば戦闘機が発着できる空母を持っても良いのかとも思います。

フィリピンでしたか、自衛隊の災害派遣でも、空母があればその活動は格段と向上します。

少し横道にそれましたが、トモダチ作戦を続けます。

三陸沖の9隻の艦艇の展開と別に、揚陸艦 トーテュガは北海道から陸自の隊員300人、車両100台を東北に輸送しています。そしてそのまま災害活動に従事しました。

もちろん復旧活動も行っています。

JR仙石線や仙台空港のがれき撤去作業を行い、動線の確保に従事しています。

そして原発事故に対しても多大な協力をしてくれました。

3月16日 原発事故の分析などを行う米原子力規制委員会(NRC)の専門家が来日

4月 1日 米船舶による福島第一原発に冷却水の給水開始

4月 2日 米海兵隊放射能等対処専門部隊(CBIRF)が日本に到着

日米同盟の長い歴史で、自衛隊と米軍の活動でこれほどの成果を上げたのは初めてです。こうしてトモダチ作戦は4月30日ほぼ終了しました。

第14章 空飛ぶ海猿

東日本大震災での海上保安庁の活動については、以前のレポートで触れています。

機動救難士、潜水士の資格を持つ者から選ばれし「空飛ぶ海猿」です。「海猿」については、伊藤英明演ずる潜水士のテレビ、映画でご存知の方が多いでしょう。

機動救難士は全国に9か所、各9人態勢で配置され、ヘリを使って迅速に行動、空からの救難を行います。関西空港にも配置されています。彼らは全国にいる約240人の潜水士から選ばれた海難救助のプロ集団であり、なかには救急救命士の有資格者もいます。ヘリを使うことによってより早く現場に到着、救助が可能となります。半面、ヘリの回転翼が巻き起こす激しい気流の中、1本のロープで目指した地点へと降下するのは難題、日ごろの厳しい訓練のたまものと言えます。派遣される現場は海とは限りません。

平成27年9月 鬼怒川が決壊、茶色い濁流に飲み込まれた茨城県常総市、「濁流には岩や流木もあるかもしれない。海にない怖さがある」と、上席機動救難士の上野は語る。そして住民23人を救出した。

いかなる困難な現場にも向き合う彼らには、厳しい訓練に耐えうる精神、体力と技術がある。それを支える励みがあります。

東日本大震災で津波に遭った宮城県石巻市の家族から届く手紙や年賀状です。自宅2階から救出した家族4人、ヘルメットに記した所属、名字を覚えていたのです。「あの日、ベランダに降りてきてくれて『もう大丈夫や』の一言は一生忘れないと思います」「人見知りで泣いていたあの子が、もうすぐ1年生!」感謝の言葉と近況がつづられ、やり取りは今も続く。

いつかどこかで、誰かを助け出す。そのための備えに休みはない。仕事だからとは言いきれない感謝と尊敬をもって、本章を終えようと思いましたが…

そうそう、どこで書こうかと思っていましたが、機動救難士のように本当に気高い意識とそれに向き合うために厳しい訓練に耐えている人がいる反面、何を考えているのかわからない国会議員もいます。

台風10号(平成28年8月)による甚大な被害が確認された岩手県岩泉町、務台内閣府政務官兼復興政務官は革靴で視察に訪れたという。ましてや、現地の職員(秘書?)に背負われて水たまりを渡ったといえます。野党のみならず、与党からも非難の声は上がりました。もし、自身の準備が怠ったのであればスーツ姿、足元は革靴のまま水たまりに突入すればかるうじて非難は免れたであろうし、潔さを称賛されたかもしれません。

以前のレポートにも書きましたが、被災地に視察に行くことで現地職員の作業が遅れるし、作業服もきれいなままで、汚すことなく帰る。復興の邪魔をするな…。今回はそれ以上にひどい行為です。即刻、辞職すべきであります。

被災地には、時期と現地の負担を考えて視察を考慮すべきであり、視察が現地にとって有用なもので無いといけません。ボランティアに参加するときも、時期、自分のできることを考えて適切に参加します。

務台さん、一から出直して、再度チャレンジしたいなら国民の審判を仰いでください。

第15章 復興への思い、若い力!

東日本大震災で被災を経験した若い人も被災しなかった若い人も、地元の復興、人の役に立ちたいと願って成長、それぞれの人生を歩んでいます。

○三陸鉄道 小松翔さん(23歳)

三陸鉄道は、岩手県と地元の18市町村、民間企業が出資する第3セクター。廃止となった国鉄の赤字路線を引き継ぎ、1984年に開業。北リアス線(71km)、南リアス線(36.6km)が沿岸部を走ります。NHKの「あまちゃん」でも登場しました。

震災で駅舎や線路に被害を受けたが、社員総出での復旧作業により、5日後には北リアス線の一部開通、2014.4.5には南リアス線で全面開通、2014.4.6 北リアス線でも全面開通となりました。

震災前年の秋、三陸鉄道の求人を担当の先生から聞いた小松さん、大船渡市で生まれ育ち、地元に残り、地域住民の役に立ちたいと願い、採用1人の難関を突破しました。

入社を3週間後に控えて希望に胸を膨らませていた矢先、震災が襲います。大船渡市でも死者・行方不明者は約420人、この中で就職内定取り消し者がいたり、肝心の三陸鉄道は全線不通、「もしかしたら自分も内定取り消しか…」しかし、三陸鉄道の社員さんが、小松さんの安否確認のため自宅まで来てくれました。

入社式は無く、初仕事は車両基地や線路に流入したがれき、泥の撤去作業です。非常時に採用してもらったこと、地域にとっての三陸鉄道の存在が小松さんの励みとなり、社員の一員として全線開通に向けての作業が進みます。

その間、運転士の免許取得に向けての勉強にも励み、2013年6月 実技試験に合格して晴れて運転士になりました。先輩運転士からの指導期間を経て、この年の11月から独り立ち、一人で北リアス線久慈-田野畑駅間を運転しました。周囲にはまだがれきが残ってます。「復興も、自分も、まだまだこれからだ」と言い聞かせます。

指導運転士の岩井さんは「いつ間にか、しっかりと仕事ができるようになった」運転担当部長の米沢さんも、「後輩の免許試験の指導をするなど、若い世代のリーダー的存在」とその成長ぶりをたたえる。

「いつもありがとうね」の声掛けに、自分の仕事に誇りを感じ、さらに三陸鉄道が地域に愛される存在になるべく精進を続けます。小松さんは、いつまでも復興列車を運転します。がんばれ、幸せを運ぶ三陸鉄道の運転手さん!

○大熊町職員 佐藤由香さん(25歳)

「田舎でも、地元で仕事して、平凡に暮らすことが幸せなんだ」、家族や幼なじみに囲まれて暮らしたい…

こんな思いで高校を卒業後、大熊町の臨時職員となった。事務補助中心の仕事から、本格的に仕事がしたいと思い正職員試験を受験、2011年に正職員となった。

3月の地震、原発事故により避難を余儀なくされ、入庁予定日の4月1日は田村市の避難所にいた。4月3日 町は会津若松市へと再避難となった。

4月中旬、町の職員としての仕事は避難住民の生活支援、「いつになったら帰れるのか?」と聞かれても、励ますことしかできない自分のふがいなさにより一人泣く日々が続いた。「仮設のエアコンが利かない」「頼んだものがちがう」、電話を取るのが怖かった。しかし、時折の「一生懸命してくれてありがとう」の言葉に勇気をもらい、頑張ってきました。

今は総務課で、復興を支える町職員を支える仕事をしています。町職員も自ら被災し、町民支援との仕事で心身のバランスを崩しがちです。ストレス軽減も佐藤さんの仕事です。

避難生活は長く続いていますが、大好きな大熊の町に戻ることを夢見て励みます。
「昔の大熊を知る私たちの世代が頑張らないと」…

きっと戻れますよ、みんなが応援しています。

○宮古海上保安署 武田健吾さん(24歳)

東北震災は、京都府舞鶴市にある海上保安学校の校内放送で確認しました。
11日は卒業後の配属が発表される日であり、配属は福島海上保安部であった。
“巡視船「なつい」機関士補を命ずる”
卒業生155人のうち、福島海上保安部に配属されるのは武田さん一人だった。
「早く行きたい」

震災対応に追われる現地では受け入れ態勢が整わず、赴任は4月14日まで延びました。
街には津波で流された船や車が散乱し、海上には流木やトタン屋根が浮いていた。
数日後、浪江町の漁港で岸壁調査の際、初老らしき漁師がやり場のない怒りをぶつけてきた。
「原発のせいでまともな漁ができない。俺たちの海を返してくれ」
武田さんは長崎県対馬市出身、周りを美しい海で囲まれた漁師町、思いは痛いほど分かった。

事故現場の第一原発付近の警備中、時化で圏内に入り込み転覆した屋形船の救助では、
防護服とマスクで救助活動、男性2人を救った。
「放射能の恐怖より、命を救うことに必死だった」と言う。
泣いて感謝され、海と命を守る海上保安官の仕事のやりがいを改めて感じた。

福島海保、八戸海保と転属、2014年3月 宮古海上保安署で任務にあたり、
巡視艇「はつかぜ」の乗組員として行方不明者の捜索、防潮堤の事故防止に目を光らす。

機関長 小林さんの評価は、「人なつっこいので地元の人たちと打ち解けるのも早いです」

武田さんはこの5年間を、「ただ全速力で走り続けてきた」と振り返り、「東北のきれいな海と
安全を守り、地域から信頼される保安官になりたい」と力強く誓った。

頑張れ、海の防人!

○福島県警察双葉署 猪狩賢治さん(28歳)

震災当日は福島県楡葉町の実家に居た。警察学校の入学は翌4月である。
原発事故により避難指示区域に設定され、家族とともに親類宅に避難する。
警察学校には、受け入れに余裕がなく、約一か月遅れでの拝命となりました。
半年の初任科を経て、11月に配属されたのはいわき東警察署、被害を受けた沿岸部を管轄し、
捜索、その後の警戒対応に追われました。
先輩から、「警察官が不安そうだと、住民をより不安にさせる」とのアドバイスに、気を張って
勤務を続ける。

15年春には双葉署に異動、ふるさと楡葉町をはじめ、原発事故被災地域を管轄する拠点である。
警務課に配属され、避難住民からの問合せ、「盗みが相次いでいるが、我が家は、
大丈夫なのか」、「すぐに警察官をむかひませます」と自信をもって対応します。

楡葉町は15年9月、避難指示の解除され、少ないながらも住民の帰還が始まった。
「ゆっくりだが、復興に向かっていく。ふるさとには任せてと言えりような仕事ぶりを見せたい」と
力を込めた。

頑張れ、ふるさとを守る警察官!

○福島県富岡消防署 金井弘樹さん(24歳)

双葉郡を管轄する双葉地方広域市町村圏組合消防本部の入庁を4月に迎え、被災する。自身は檜葉町出身、3月下旬 ほかの入庁予定者とともに召集された。「この状況で働く意志はあるか」、幹部に念押しされた。

原発事故まもなく、行方不明者の捜索活動、放射能汚染の中での危険な業務です。「人を助けるためにこの道を選びました」と即答したと言う。

火災現場から人を助け出すTVドラマを見て憧れ、高校卒業時の試験に失敗、翌年の再チャレンジで合格した。消防学校で火災現場での消火活動訓練の外、放射線量の高い地域での活動のため、防護服の着脱もしっかりと教育された。

「いつか戻れると信じている人のために、町を守り続ける」

負けるな、ファイヤーマン!

○宮城県警察仙台中央署 佐藤慶朋さん(27歳)

石巻市出身、2008年の岩手・宮城内陸地震で、警察官が身を粉にする活動を目の当たりにし、警察官への道を選んだ。

東北地震は大学の卒業を控えた甲府市で迎え、テレビでの津波、火災に絶句、10日後に戻ったふるさとの惨状に、友達の行方不明に言葉が出ません。親友の中村さんは1か月後に遺体が確認されました。「石巻に居れば…」故郷の力になれなかったことを悔やむ。

採用試験に一度失敗し、夏の試験で合格、秋に警察学校に入校し、12年春には国分町交番に勤務となる。14年からは東北管区警察局機動隊員を兼務、定期的に行方不明者の捜索を行う。

「一人でも多くを家族のもとに返してあげたい」、沿岸部の捜索では熊手を握りしめ、丁寧に砂をかき、目を凝らす。「捜索は今生きている自分にしかできない。故郷が震災前の姿を取り戻せるように貢献し続けたい」

一人でも多くの思い出を掘り起こせ、管区機動隊員!

紹介した以外にも多くの若者が、故郷、被災地の復興のために頑張っています。

漁協で特産のワカメの出荷販売を担当する木川勇さん(23歳)、「三陸の漁業は復興の途中、僕らが頑張らなきゃあダメなんです」

地元のスーパーの再建により、被災地の生活を、お客との距離が近くなるようにと努力している小田島竜二さん(23歳)、「自分が切り盛りする店がある、生活できずに地元から離れる人を一人でも食い止め出来れば…」

思いは東北、目指せふるさとの復興!

第16章 風の電話

東日本大震災で1200人余りの犠牲者が発生した岩手県大槌町、海が臨める高台に電話線のつながっていない電話ボックスがあります。
それは会えない相手に想いを伝える『風の電話』

庭師さんが自宅の庭に設置しています。
「風の電話は心で話します 静かに目を閉じ 耳を澄ませてください 風の音がまた浪の音があるいは小鳥のさえずりが聞こえたなら あなたの想いを伝えてください」

庭師さんはがんで亡くなつたいとこのことを想う時、悲しむ家族を癒そうと、2010年冬、不要となって譲り受けた電話ボックスを自宅庭に置きました。
電話ボックスには誰でも行けます、行くことができます。

震災後、家族を、友人を亡くした人たちが訪れ、心の中に溜まった想いを吐露します。
電話ボックスは、空にいる人と静かに対話する場所です。

「聞こえないと思ったら、本当に何も聞こえないんです。でも、じっと耳を澄ませると何かが聞こえてきますよ」

庭師さんは言います、「あまりにも突然、多くの命が奪われた、せめて一言、最後に話があった人がたくさんいるはずだ」
そして、震災で突然の別れを強いられた被災者の心の助けにと、改めて植栽を整備したという。

「遺族と亡くなった人の思いをつなぐことが必要と思った」
「気丈にしている人でも、実際は心の中で泣いている人が多い。心情を吐露することで少しでも苦しみから楽になってほしい」

備え付けのノートには利用者が書き残しています

「ようやく別れを告げられた」
「あなたの白髪がとにかく懐かしいです。私はこれからの生活に全力を出して貴方の娘を守っていきます」
「あの日から2か月たったけど、母さんどこにいるの？ 親孝行できずにごめんね。あいたいよ。絶対見つけて、お家に連れてくるからね」

このことは絵本にもなりました。「かぜのでんわ」いもとようこ/作・絵、金の星社/刊
また、歌にもなっています。

庭師さんは石造りでコテージ風の建物、『森の図書館』も作りました。
周りは美しい芝生と花壇、そして木漏れ日に輝く森に囲まれています。
大槌では震災で図書館が無くなってしまい、子供たちの読書の場が無くなったことがきっかけとなり『森の図書館』が生まれました。
呼びかけで集まった数千冊のなかから、主に子供向けの書籍を選んで書架しました。
今後は子供たちの作品を展示できるギャラリースペースとして利用できるように考えていると聞きます。

また庭にはツリーハウスを造ることも考えています。
被災した人たちとともに、ハンモックを吊るして時間をつぶし、「お茶っこ」と呼ばれる人と触れ合う機会、場を提供したいとも考えられています。
* お茶っこ:宮城県、秋田県で使われます。お茶を飲みながらの井戸端会議のことです。

被災者の心に寄り添い、子供たちの成長を願い、震災から生き延びた自らの命を心のケアに、誰かの役に立つことに使いたい、そう考えられています。

さて、この庭師さんをご紹介します。

佐々木 格(いたる)さん 1945年岩手県釜石市生まれ

1999年に会社を退職後、大槌町に移住、ガーデン「ベルガーディア鯨山」をオープン

2011年『風の電話』を設置、2012年『森の図書館』をガーデン内に造る。

追記 投函しても配達されないポストがあります。以前、この話をどこかで聞いたことがあり探してみましたが、見つかりません。

『風の電話』と同じように、亡くなった人への思いを手紙に認めることによって、心の整理ができる。手紙は届くことのないポストに投函します。

このポストは郵便局のポストではなく、個人のポストです。

第17章 響け、復興の音色

宮城県石巻市、市中心街にある楽器店「サルコヤ」の経営者井上晃雄(てるお)さんは津波で壊れたピアノの修理をしています。

サルコヤは津波で1.7m浸水し、ピアノ30台が使えなくなりました。廃業も考えましたが、店が津波に耐えたこともあり、そしてたくさんのボランティアに支えられ、思い直したと言います。

ボランティアには、ピースボートのメンバー、調律専門学校の生徒、知人の調律師、元プロボクサーの須藤元気さんの率いる「Team We ARE ALL ONE」、そして音楽家、作曲家なども復興のため汗を流しました。

*ピースボート*国際交流を目的として設立された日本のNGO(非政府組織)

2011年9月11日 歌手のクミコさんは、再生ピアノ1号で唄う“心の復興”コンサート「一歩だけ前へ…」を石巻市民と一緒に開催しました。

これを機に、クミコさんや多くの方々の協力により「きつとツナガル基金」が立ち上がり、音楽評論家 湯川れい子さん、医師 鎌田實先生、落語家 笑福亭鶴瓶さんも基金に参加しています。

* 鎌田實 諏訪中央病院名誉院長、チェルノブイリ原発事故で活躍東北震災でも支援を行っています。「がんばらない」のキャッチフレーズ、紙おむつのコマーシャルでテレビに出ています。以前のレポートで先生について記述しています。

2013年3月 米国人気歌手 シンディ・ローパさんは石巻市を訪問、津波をかぶったピアノの修理をする井上さんの姿に胸を打たれ、壊れたピアノを購入、「市民のために使って」と修復を依頼した。

ピアノは井上さんの手で、3か月余りをかけて修復され、2016年8月10日の新しい石巻市立病院の完成記念式典で披露されました。

上面はピカピカですが、側面や脚には津波の傷跡があるものの、ピアノの響きは震災からの復興を、被災にもめげない響きをもたらします。

シンディさんからのメッセージです。

「時間をかけて入念な修理をしてもらえたから、ピアノは復活できた。ありがとう」

そして、来春に再訪する考えを明らかにしています。

来春、このピアノの前で唄うシンディさんがみられることでしょう。感謝!

第18章 つなぐ命、思い出を忘れない

東日本大震災では多くの人たちが亡くなっています。
残された多くの方は、突然の家族の死を受け入れられずに苦しんでいます。
そんな生活の中で、授かった命に亡くなった家族を重ねて小さな命の成長と、個人の思い出を忘れないようにと願います。

○西城春音ちゃん(当時6歳) 弟:春汰君(2013.7.18生)

「家族の中で『春』という字が生き続けてほしい。そうすれば、ハルの存在も家族の中で生き続ける」

石巻市の西城靖之さん、江津子さんは震災後の2年過ぎに生まれた次男の春汰(しゅんた)君に、亡くなった次女の春音(はるね)ちゃんの名から「春」の一文字をもらった。春音ちゃんは、幼稚園の送迎バスに乗っていて、津波に巻き込まれたうえ、バスは火に包まれた。

3日後にたどり着いたバス、どの子が我が子なのか、変わり果て、抱きしめることもできなかった。

春音ちゃんの存在を身近に感じていたい、その願いで震災後に授かった命に「春汰」と名付けました。

長女の楓音(かざね)ちゃんは、春音ちゃんが小学校入学後に使うはずだったランドセルを背負います。

長男の靖汰(せいた)君はカスタネットやクレヨンを使います。

「春汰君には鍵盤式のハーモニカを持たせるつもり」、夫妻は言います。

春音ちゃんの持ち物を大切にしまうことなく、壊れてもいい、使うことによって春音ちゃんを忘れないし、使った歴史が春音ちゃんが使うはずだった歴史に重なります。

元気いっぱいの春汰君は一家のアイドル、おしゃべりは小さなころの春音ちゃんに似ている。靖之さんは言います、「こいつがいるから頑張らなきゃって自分に言い聞かせる。悲しみの大きさは今も変わらない。でも、シュンの成長や愛らしさが悲しみの周りを何重にも包んでいくんです」

28年3月、生まれて初めて春汰君は髪を切りました。

西城家には、楓音ちゃん、靖汰君、春音ちゃんの胎毛筆があり、春汰君の胎毛筆を加えて4本がそろいます。

ご両親が子供の健やかな成長を願って、そして春音ちゃんの思い出をいつまでも忘れないように、大切に持ち続けられます。

○上野倅太郎君(当時4歳) 永吏可ちゃん(当時8歳) 妹:倅吏生ちゃん(2011.9.16生)

「この子の誕生を祝福してくれるはずの家族がいない」、父親 敬幸さんが流した涙は、よろこびのそれではなく、悲しみの涙だった。

倅吏生(さりい)ちゃんの姉 永吏可(えりか)ちゃん、兄 倅太郎(こうたろう)君と祖父母は震災の犠牲となった。

震災前1か月、母親 貴保さんは「お腹を天使がさすっている夢をみた」と言います。

家族が新しい命を喜んでくれるはずだった、「何でここに家族の笑顔がないんだ」、夫婦の涙は止まりません。

姉と兄の名の一文字ずつをもらった倅吏生ちゃん。昨年入った幼稚園では、

兄が使うはずだったかばんをぶら下げ、元気に通園している。

「あっという間にお兄ちゃんの年齢を超えたな」

この5年間、倅吏生ちゃんの成長が夫妻を支えた。

今年のクリスマス、「サンタさんに何を願うの」と尋ねた母に、倅吏生ちゃんは答えます。

「エリカちゃんとコウちゃんに会いたい」

津波のこと、姉兄のことは話してきたが、自分の気持ちを言葉にしたのは初めてだった。

「ただただ、健やかに育ってほしい」、夫妻が願うのはそれだけだ。

○川口**翔**也君(当時4歳) 弟:**博翔**君(2013.2.6生) 弟:**海翔**君(2014.9.4生)
「お兄ちゃんよりもっと羽ばたいてほしい、津波なんかが来ても、飛び越えるくらい
元気な子になって」
岩手県大槌町の**博翔**(ひろと)君と**海翔**(かいと)君の名前には、家族のそんな願いが
込められています。
翔也(しょうや)君の一字「翔」を二人の子供につけることで、死にたいほどの悲しみから娘は
一つ乗り越えれたと思う、祖父の**博美**さんはそう思っています。

翔也君は**博美**さんと暮らしていました。「じいじが**翔也**のことをいつも守ってあげるからね」、
一緒に入るお風呂で指切りをしました。
翔也君は津波にのまれ、今も行方不明。「約束を守れなかった」、避難所で布団をかぶって
一人で泣いた日から後悔が消えることはありません。

震災後に生まれた兄弟は、成長につれて、**翔也**君に似てきた。「じいじ帰るよ」、別れる時に
すぐに泣きだす**海翔**くんは、**翔也**君と重なって見える。
この子たちが大きくなったら、しっかりと話すつもりだと言う。
津波のこと、そしてお兄ちゃんのことを…

○斎藤**康**志さん(当時36歳) 次男:**康**太君(2011.4.8生)
震災の翌月に生まれた宮城県気仙沼市の**斎藤康太**(こうた)君は最近、行方不明の
父の**康志**(やすし)さんのことを「お空にいるんだ」と周囲に話します。
半年前のころ、父の写真が掲げられた仏壇にご飯を供える母の**雅恵**さんにこう言いました。
「**康太**がする」
雅恵さんは「あの時、この子がお腹にいなかったら、きっと夫の後を追った」と目を伏せます。

最近、**康太**君は**康志**さんに似てきたと言います。優しいけど頑固、目元はそっくり。
幼稚園に行く前には必ず、「行ってきます」と仏壇に手を合わせます。
お空から、「こいつ、俺に似ているな」と言ってるように思い、微笑む**雅恵**さんがいます。

康太君の誕生前、夫婦で名前を決めていましたが、義理のご両親に「**康志**さんの一文字を
つけてほしい」と頼まれ、夫の生まれ変わりだと信じるご両親の気持ちが痛いほど分かり、
「**康太**」と名付けました。

兄の**悠翔**君にそっとお願いします。「**康太**に、お父さんのことを教えてあげてね」
寝る前、布団の中でお父さんとの散歩の思い出などを弟に小さな声で話してくれます。

雅恵さんは願います、「36歳か、やっぱり若いな…。お父さんはまだまだやりたいことがたくさん
あったはず。子どもたちにはその分も自分のやりたいことを存分にやってほしい」…

昨日まで走り回っていた我が子が、隣で寝息を立てていた夫が、震災で突然いなくなった。
心の整理をしようにも、しょうのない悲しみに襲われます。
そんな時、新しい命の誕生に亡くなった人を重ねて、成長を見守りつつ、自身も悲しみの淵から
少しでも這い上がろうとしています。
新しい命が健やかに、成長されることを願っています。

第19章 NPO法人 日本救難バイク協会

さて、いよいよレポートのねたも無くなったので、私の所属するNPO法人を紹介します。「NPO 日本救難バイク協会」、英語では NPO Bike Rescue Society - Japan で、略称:BRS-Jといます。

阪神淡路大震災にバイクの行動力が確認され、これをきっかけに災害時においてバイクでの支援、ボランティアを行うことを目的として設立されました。もっとも、バイクだけのボランティアだけでなく、災害支援全般に活動します。平時は防災訓練参加、救命講習、安全走行訓練等を行い、災害時は現地でボランティアのコーディネートや災害活動等を行います。

もともと、旧東久留米市消防本部に「赤バイ」なる「白バイ」の消防版があり、バイクの行動性が阪神淡路大震災で公のものとなりました。赤バイは、火災等に渋滞をもたせず、はやく現場に到着することができ、初期の消火や救命措置を行い、後発部隊に情報の提供を行います。阪神淡路大震災では、行政の要請により赤バイ隊が出動、個人のバイクボランティアとともに仮設救護所等に各種医薬品や衛生材料等を急送しました。瓦礫で道路が閉鎖されたり、交通渋滞する中で、緊急を要する要請に活躍することが出来ました。ただ反面、血液やインシュリン等の生命維持の高いものについては個人のボランティアに託すのは問題であるとの意見もありました。責任の所在や指揮命令系統が不明瞭という事実があったからです。

協会は、当時の東久留米市の消防長だったかと思う千葉さんの声掛けで設立されました。社会に認知された組織の設置とライダー自身の災害支援に対する資質の向上が、災害活動において、バイクボランティアをより有効に活用できる手段と痛感したからです。まずは平成7年4月 阪神淡路に派遣された消防職員、学識経験者や一般市民等により「全日本救難バイクを考える会」を発足させます。そして翌年には、「日本救難バイク協会」と改名、平成11年9月にはバイクボランティアとして初のNPO法人「NPO日本救難バイク協会」として社会的地位の確保に至ります。

協会の主力、本部は関東にあり、北海道から九州まで会員は存在します。東北震災では北海道の会員が活動したり、熊本震災では長崎の会員が活動しています。もちろん、他の地域からも支援活動に駆けつけています。

さて私が協会に参加する、した経過についてお話しします。阪神淡路大震災当時、震源地に一番近い病院に勤務、余力がありながら支援を受ける側であり、十分な活動が出来なかったという心残りを抱えています。震災が落ち着いたころには、引っ越し(仮設住宅から恒久住宅)ボランティアに参加しました。そんな折、雑誌にバイクボランティアが紹介され、協会のことが取り上げられていました。バイク免許取得前からのライダー(?)であり、もちろん飛びつきました。阪神淡路以降の災害では、ロシア船籍のタンカー「ナホトカ」の座礁による重油流出事故がありました。活動の機会もなく、他の震災でも組織的な活動はできていませんでした。そのうちバイクから降りましたが、協会会員として名前を残すうちに東北震災です。自身がボランティアに参加しやすい環境になっていたこともあり、東北震災には通算7度の現地支援を行い、丹波市水害や熊本震災にも活動した現在があります。現在は理事として名前を連ねていますが、遠方という理由で理事会への参加は1回のみで幽霊理事をしています。

さてさて、ボランティア、災害活動やバイクに興味のある方は、当協会にお問い合わせ、参加をお願いします。

〒214-0032 神奈川県川崎市多摩区柘形1-10-9-1
NPO日本救難バイク協会 事務局
E-Mail: npo-brsj@aroma.ocn.ne.jp
携帯: 090-4819-1073

まずは協会ホームページをご覧ください。

最終章 いつまで続くのだろう…

亡くなった人は生き返りません。
無くなった生活は取り戻せません。

ただ、前を向いて新しい家族と新しい生活をつくるために歩んでいきます。

人は一人では生きていけません。
「人」という字は、寄り添って、支え合っています。

せちがないと言われる現在において、震災、災害は寄り添い、支え合いの大切さを教えてくれました。

少しでも構いません、できることで構いません。
人に寄り添って、支えてみませんか、支えられてみませんか。

そして復興はいつまで続くのか、終わりはないのかもしれませんが。
ただ忘れないでください、多くの悲しみを、多くの優しさを…

- * 誤字脱字はご容赦ください。
- * 新聞、ネットなどでの情報を無断で使用しましたこと、ご容赦ください。
- * レポート作成に時間を要し、記事の内容にずれがありますこと、ご容赦ください。